普賢寺遺跡発掘調査概要・Ⅱ

1991. 12

はしがき

門真市古川橋駅周辺は、都市化が進む本市でも最も急速に変貌しつつある地域といえます。普賢寺遺跡のあるこの駅の北側でも古川橋駅北区画整理事業が実施されることになり、昭和59年から発掘調査が行われています。

これまでの調査で、弥生時代前期の遺構・遺物、平安時代後期から室町時代にかけての土塀・溝・瓦・仏具等が検出されており、当遺跡の内容が次第に明らかになってきています。

今回の調査は門真市教育委員会が当遺跡内で行う２回目のもので、大阪府教育委員会が行った調査を入れますと３回目となります。

調査では、室町時代の寺院に関係する多くの資料が出土し、大きな成果をおさめることができました。

この度『普賢寺遺跡発掘調査概要・Ⅱ』を刊行するにあたり、調査にご協力いただいた関係各位をはじめ、調査に参加された方々に深く感謝いたしますとともに、今後とも文化財の保護に関して、ご理解とご協力をお願い申し上げます。

平成３年12月

門真市教育委員会
教育長　中谷　決

例　　言

1．本書は門真市垣内町 553－1及び幸福町555－9で実施された門真市古川橋駅北区画整理事業に伴う普賢寺遺跡発掘調査概要報告書です。

2．調査にあたっては、門真市古川橋駅北区画整理組合の多大な協力を得ました。

3．現地調査は、門真市教育委員会社会教育課宇治原靖泰が担当し、昭和61年5月6日に着手し、同年7月10日に終了しました。

4．本書の編集・執筆および写真撮影は宇治原靖泰がおこない、観察表は新谷真範・寺町節生が作成しました。

5．調査・整理には、新谷真範・寺町節生・小林秀隆・寺川寛・川越菊美・堀内正己・宮永和紀・秋山由紀・小竹宏司・宮本順子・林淳子の協力を得ました。

6．調査・整理にあたり、水野正好（奈良大学）・福田英人（大阪府教育委員会）・梶山彦太郎の各氏よりご教示を得ました。

ここに記して感謝の意を表します。

本　文　目　次

第１章　調査の経過 …… 1
第２章　位置と環境 …… 2
第３章　調査の概要 …… 3
　第１節　土　　層 …… 3
　第２節　遺　　構 …… 6
　第３節　遺　　物 …… 6
まとめにかえて …… 9

挿　図　目　次

第１図　普賢寺遺跡位置図 …… 2
第２図　Ａ・Ｂ地区土層断面図 …… 4・5
第３図　Ａ・Ｂ地区平面図 …… 7・8
第４図　出土遺物実測図（土器・土製品） …… 17
第５図　遺物実測図（人面墨書土器・不明瓦製品） …… 18
第６図　遺物実測図（軒丸瓦） …… 19
第７図　溝１　出土遺物実測図（軒平瓦） …… 20
第８図　溝１　出土木製品実測図（柿経） …… 21
第９図　出土木製品実測図（絵馬） …… 22
第10図　出土木製品実測図（絵馬） …… 23
第11図　出土木製品実測図（鋤・不明） …… 24
第12図　出土木製品実測図
　　（毬打の玉・燭台の一部・火つけ棒・刀子束） …… 25
第13図　溝１　出土木製品実測図（漆器椀・櫛・不明） …… 26
第14図　出土木製品実測図（箸・不明） …… 27
第15図　溝１　出土金属製品実測図（刀子・釘隠・銅銭） …… 28
第16図　溝１　出土銅銭拓影 …… 29

表　目　次

表 1　土器観察表(1) …… 9
表 2　土器観察表(2) …… 10
表 3　軒丸瓦・軒平瓦観察表 …… 11
表 4　銅銭観察表(1) …… 12
表 5　銅銭観察表(2) …… 13
表 6　土製品観察表 …… 13
表 7　木製品観察表 …… 14
表 8　金属製品観察表 …… 14
表 9　柿経観察表 …… 15
表10　絵馬観察表 …… 16

図　　版

図版 1　航空写真・A地区西から
図版 2　遺　構
図版 3　遺　構
図版 4　遺物出土状況
図版 5　遺物出土状況
図版 6　遺物出土状況
図版 7　溝 1 出土遺物　土師質皿
図版 8　溝 1 出土遺物　土師質皿
図版 9　溝 1 出土遺物
図版10　出土遺物　軒丸瓦
図版11　溝 1 出土遺物　軒平瓦
図版12　溝 1 出土遺物　柿経(1)
図版13　溝 1 出土遺物　柿経(2)
図版14　溝 1 出土遺物　絵馬
図版15　溝 1 出土遺物　木製品
図版16　溝 1 出土遺物　木製品
図版17　溝 1 出土遺物　金属製品・木製品
図版18　溝 1 出土遺物　輸入銅銭

第 1 章　調 査 の 経 過

今回の調査は、昭和60年５月に門真市古川橋駅北区画整理組合より、門真市垣内町・幸福町内の普賢寺遺跡で、ビル建設および街路工事の計画が門真市教育委員会に示された。門真市教育委員会では早速遺構・遺物の状態を知るために工事対象地の試掘調査を行った。その結果、室町時代の遺物を確認し、遺構の存在も予想された。しかし、工事対象地の南の部分では、地層が異なり遺構・遺物を検出しなかった。

その後、本調査のための協議を重ね、昭和61年５月６日から同年７月10日までを調査期間とし、約1000㎡を調査することになった。

調査地は、ほぼ中央に駅に通じる南北の道があり、この道を挟んで東をＡ地区・西をＢ地区とした。盛土および耕土は機械で除去し、その後人力による掘削を行った。

包含層には中世～近世の遺物が含まれるが、室町時代の遺物が多く、特に瓦片が多く出土した。

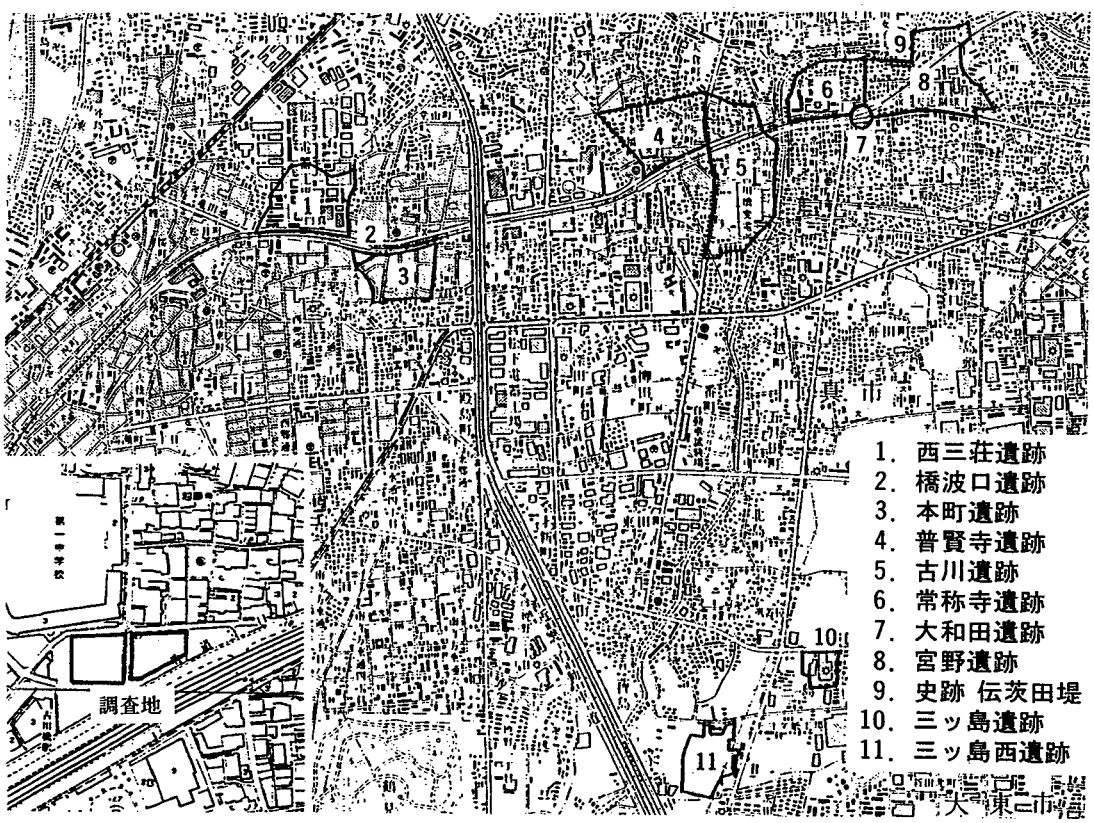
遺構は調査地の北側に集中し、南側は遺構・遺物ともに減少する。

第 2 章　位 置 と 環 境

門真市は大阪府の東北部に位置し、東を寝屋川市、西と北を守口市、南を大阪市鶴見区と大東市に接する面積 12.21㎢、人口約14万人の市である。淀川左岸にひろがる低湿地に市域が含まれ、南部では現在も蓮根、くわいが生産されている。

縄文時代は、全市域が河内湾に含まれていたが、陸地化により弥生時代前期頃に市域の北部で定住が可能になり、生活場所が広がっていく。しかし至るところに湿地が残り、淀川をはじめとする大小の河川の氾濫による水害にしばしばみまわれる土地であった。

普賢寺遺跡は、市内で最も早く生活が始まったところで、平安時代後期頃には「普賢寺」という寺院が建立され室町時代まで続いた。



1／5000　　第１図　普賢寺遺跡位置図

第３章　調査の概要

寺域内での発掘調査は、市立第一中学校の東側で２回行われている。いずれの調査も溝が検出されており、寺域の東端に掘られたものではないかと思われる。出土遺物は、平安後期から室町時代の瓦をはじめ、仏具など寺院に関係する資料が出土しているが、建物跡は検出されていない。

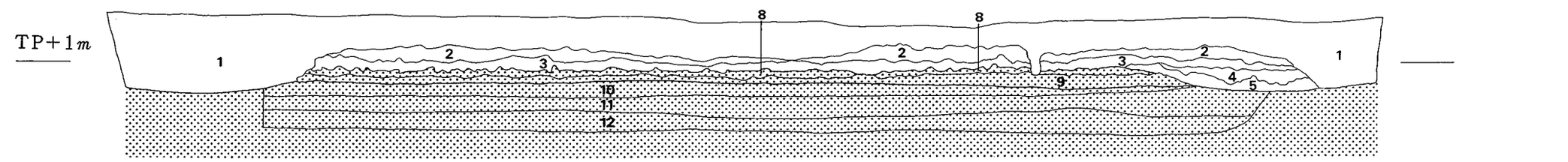
今回は市立第一中学校と古川橋駅の間で調査が実施された。調査地は寺院跡の南端に位置するとみられる。

第１節　土　層

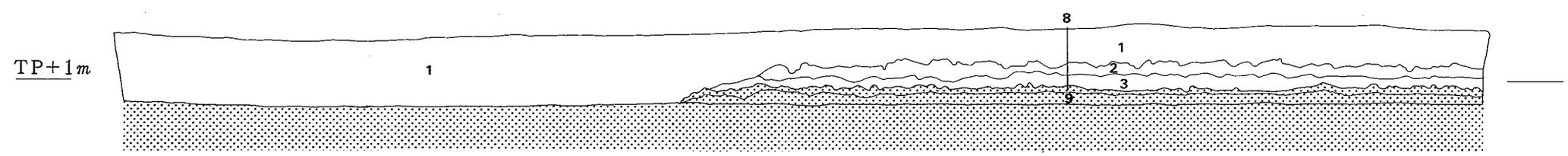
本調査地ではＡ地区・Ｂ地区の西壁と北壁の土層堆積断面を観察し、平面調査終了後Ａ・Ｂ両地区で断ち割りトレンチを入れ、土層観察を行った。ここでは西壁断面に断ち割りトレンチを付け加えた。（第２図・図版３）

調査以前は商店や住宅が建っており、地表面はTP1.8～2.0mを測る。調査地内で無遺物層を含め12層の土層堆積を確認した。

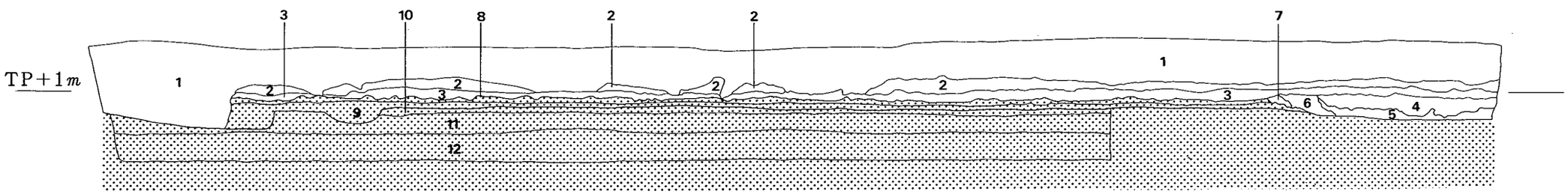
第１層は現代の盛土と攪乱である。第２層は暗灰褐色微砂混り粘土層で、現代の耕作土であるが、中・近世の遺物が混じっている。第３層は暗灰褐色粘土で、中世の遺物包含層である。第４～７層は溝１の埋土である。第８層は淡緑灰色粘土で、この層以下は無遺物層である。第９～12層は砂と礫の堆積で、拳大の角の取れた礫を10％程度含んでいる。



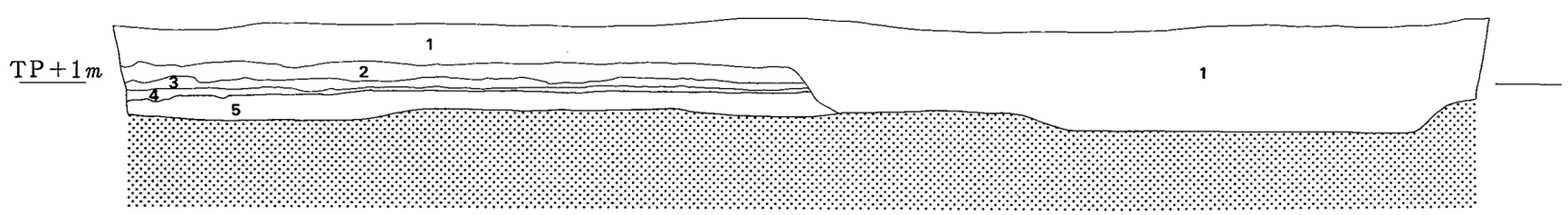
A地区西壁土層断面図



A地区北壁土層断面図



B地区西壁土層断面図



B地区北壁土層断面図

第2図　A・B地区土層断面図

第2節　遺　構

遺構は調査地の北側に集中していた。

溝1（第3図）

A～B地区に及ぶ東西方向の溝で、調査地の北壁に平行に検出した。全長は溝が調査地外に延びるため不明だが、調査地内で約30mを測る。幅も一部を検出したにすぎないのでよくわからないが、7m程度と考えられる。現状の深さは約 0.5mで、調査した範囲では二段に掘られていたようである。またA地区の北西隅からほぼ直角に北に曲がっていた。

溝2（第3図）

溝1の南側にほぼ平行した形で検出した。埋土は黒灰色粘土である。大部分が攪乱を受けており、規模は不明である。

溝3（第3図）

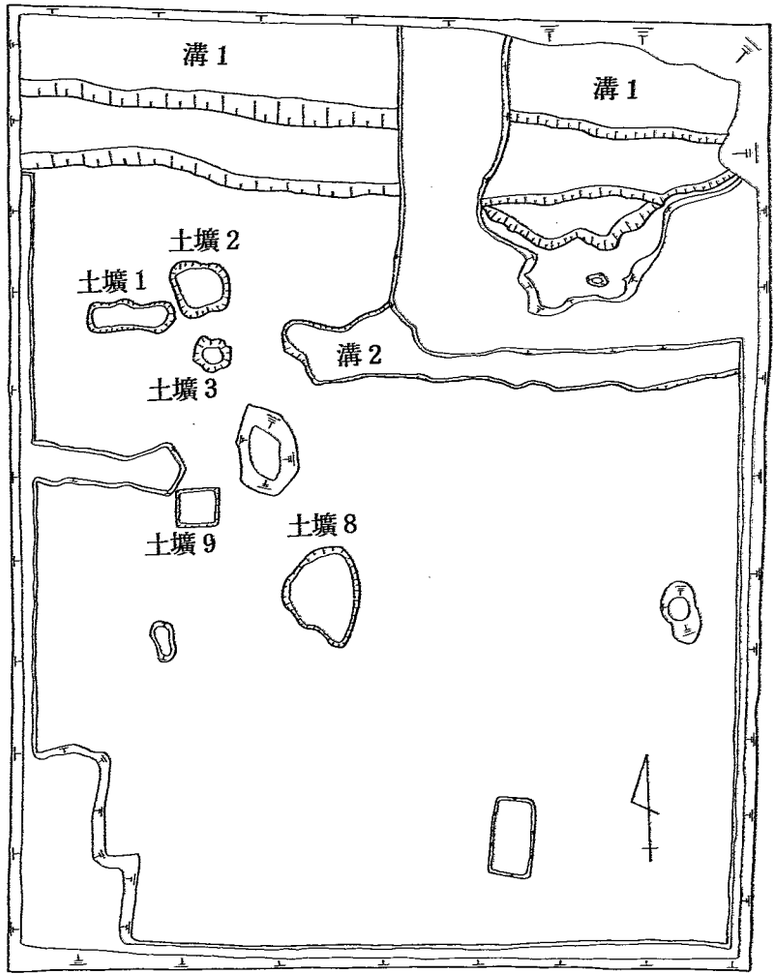
溝1の東端に接続した溝である。埋土は黒褐色粘土である。溝1と同時期に機能していたと思われるが、若干新しいかもしれない。長さは不明であるが、最大幅 2.1m、深さ 0.2mを測る。

土壙（第3図）

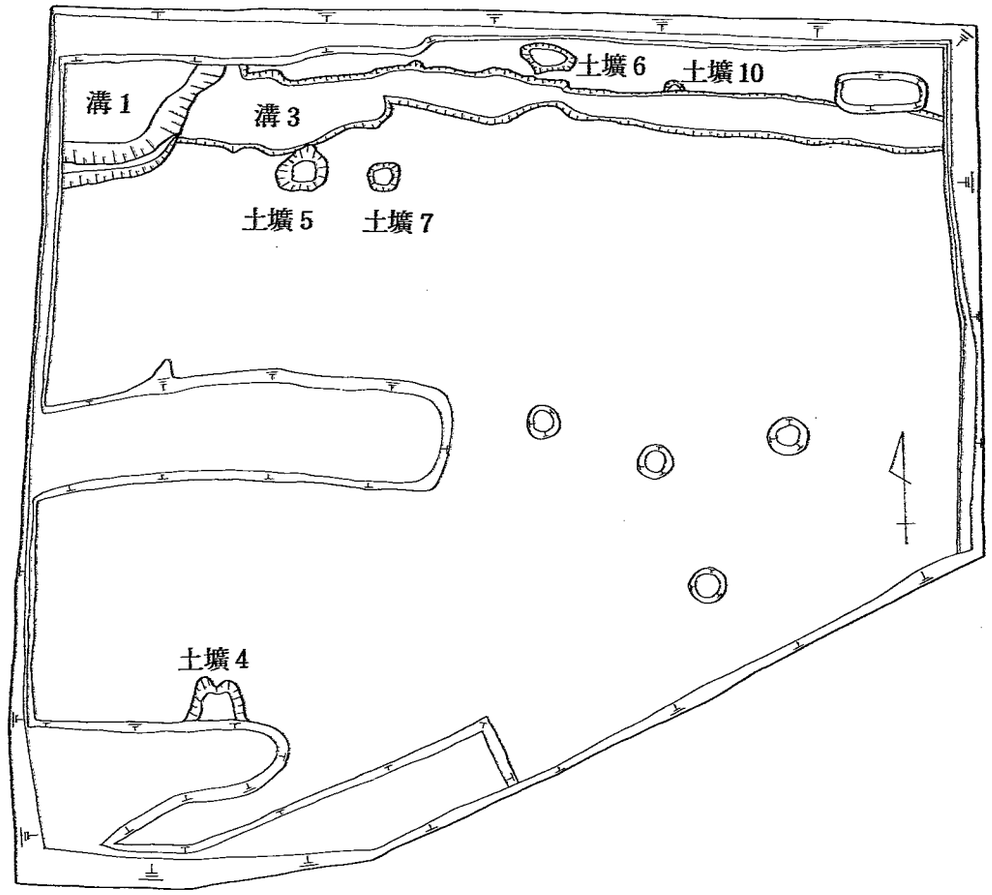
全部で10基検出したが、性格の判るものはない。遺物もほとんど出土しなかった。

第3節　遺　物

遺物は中世が中心でコンテナ 100箱程出土した。溝1 からは瓦、土師質土器・木製品・漆器・金属器等の寺院に関係する遺物が出土した。これらの遺物は水分の多い粘土に埋まっていたため保存状態が良好で、柿経のような薄い木片も良好に保存されていた。



B地区平面図



A地区平面図

第3図　A・B地区平面図

表1　土器観察表(1)

番号	器種	器形	法量（cm） 口径	法量（cm） 器高	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	土師質皿	小皿	7.2	2.2	◦体部はやや外反しながら立ち上がる。 ◦口縁端部は尖がり気味に丸くおさめる。	◦体部内面はヨコナデ。 ◦底部内面はナデ。 ◦体部外面は指頭圧痕。	
2		中皿	8.4	2.0	◦体部はやや外反しながら立ち上がる。 ◦口縁端部は丸くおさめる。	◦体部内面はヨコナデ。 ◦底部内面はナデ。 ◦体部外面は指頭圧痕。	
3		小皿	7.8	2.2	◦体部はやや外反しながら立ち上がる。 ◦口縁端部は丸くおさめる。	◦体部内面はヨコナデ。 ◦体部外面上半は指頭圧痕の後ヨコナデ。 ◦口縁部はヨコナデ。	灯明皿か？
4		中皿	8.0	2.0	◦体部はやや直線的に立ち上がる。 ◦口縁端部は尖がり気味に丸くおさめる。	◦体部内面はヨコナデ。 ◦体部外面上半，口縁部は指頭圧痕の後ヨコナデ。	◦口縁部にスス付着。 ◦灯明皿として使用。
5		中皿	8.0	2.0	◦体部はやや直線的に立ち上がる。 ◦口縁端部は丸くおさめる。	◦体部内面はヨコナデ。 ◦底部内面はナデ。 ◦体部外面は指頭圧痕。	◦口縁部にスス付着。 ◦灯明皿として使用。
6		小皿	7.6	1.8	◦体部は直線的に立ち上がる。 ◦口縁端部は丸くおさめる。	◦体部内面はヨコナデ。 ◦体部外面は指頭圧痕。 ◦口縁部外面は弱いヨコナデ。	
7		小皿	7.6	1.9	◦体部は直線的に立ち上がる。 ◦口縁端部は丸くおさめる。	◦体部内面はヨコナデ。 ◦体部外面は指頭圧痕。 ◦口縁部は指頭圧痕の後ヨコナデ。	
8		小皿	7.6	2.1	◦体部はやや直線的に立ち上がる。 ◦口縁端部は丸くおさめる。	◦体部内面はヨコナデ。 ◦体部外面は指頭圧痕。	◦口縁部にスス付着。 ◦灯明皿として使用。
9		中皿	8.2	2.1	◦体部は内弯気味に立ち上がる。 ◦口縁端部は丸くおさめる。	◦体部内面はヨコナデ。 ◦底部内面はナデ。 ◦体部外面は指頭圧痕の後ナデ。 ◦口縁部はヨコナデ。	◦口縁部にスス付着。 ◦灯明皿として使用。
10		中皿	8.2	2.0	◦体部は内弯気味に立ち上がる。 ◦口縁端部は丸くおさめる。	◦体部内面はヨコナデ。 ◦底部内面はナデ。 ◦体部外面は指頭圧痕。	◦口縁部にスス付着。 ◦灯明皿として使用。
11		小皿	7.8	2.0	◦やや凹む底部から，体部は外反しながら立ち上がる。 ◦口縁端部は丸くおさめる。	◦体部内面はヨコナデ。 ◦底部内面はナデ。 ◦体部外面上半，口縁部は指頭圧痕の後ヨコナデ。	◦口縁部にスス付着。 ◦灯明皿として使用。
12		中皿	8.0	1.9	◦凹む底部から体部は内弯気味に立ち上がる。 ◦口縁端部は丸くおさめる。	◦体部内面はヨコナデ。 ◦底部内面はナデ。 ◦体部外面は指頭圧痕の後ヨコナデ。	
13		中皿	8.2	2.1	◦凹む底部から体部はやや外反しながら立ち上がり，中位で肥厚してそのまま口縁端部に至る。 ◦口縁端部は反り気味に丸くおさめる。 ◦内底面に沈線を有する。	◦体部内面はヨコナデ。 ◦体部外面上半は指頭圧痕。 ◦体部外面下半は底部外面はナデ。	◦口縁部にスス付着。 ◦灯明皿として使用。
14		中皿	8.0	2.0	◦大きく凹む底部から体部は内弯しながら立ち上がる。 ◦口縁端部は丸くおさめる。	◦体部内面はヨコナデ。 ◦底部内面はナデ。 ◦体部外面は指頭圧痕の後ヨコナデ。	◦口縁部にスス付着。 ◦灯明皿として使用。
15		中皿	8.6	2.0	◦体部は中位で肥厚させ内弯気味に立ち上がる。 ◦口縁端部は尖がり気味に丸くおさめる。	◦体部内面口縁部はヨコナデ。 ◦体部外面は指頭圧痕の後ナデ。	
16		小皿	7.4	1.7	◦やや凹む底部から体部は直線気味に立ち上がる。 ◦口縁端部は丸くおさめる。	◦体部内面はヨコナデ。 ◦底部内面はナデ。 ◦体部外面は指頭圧痕の後ナデ。	◦口縁部にスス付着。 ◦灯明皿として使用。
17		小皿	7.6	1.9	◦体部はほぼ直線的に立ち上がる。 ◦口縁端部は丸くおさめる。	◦体部内面はヨコナデ。 ◦底部内面はナデ。 ◦体部外面は指頭圧痕の後ナデ。 ◦口縁部は指頭圧痕の後ヨコナデ。	
18		中皿	8.1	1.6	◦やや凹む底部から体部は直線的に立ち上がる。 ◦口縁端部は尖がり気味に丸くおさめる。	◦体部内面はヨコナデ。 ◦底部内面はナデ。 ◦体部外面は指頭圧痕の後ナデ。 ◦口縁部は指頭圧痕の後ヨコナデ。	
19		小皿	7.6	1.4	◦やや凹む底部から体部は直線気味に立ち上がる。 ◦口縁端部は丸くおさめる。	◦体部内面底部内面はナデ。 ◦体部外面は指頭圧痕の後ナデ。	

表1　土器観察表(2)

番号	器種	器形	法量（cm）		形態の特徴	手法の特徴	備考
			口径	器高			
20	土師質皿	小皿	7.8	1.6	◦やや凹む底部から体部はほぼ直線的に立ち上がる。 ◦口縁端部は丸くおさめる。	◦体部内面・口縁部はヨコナデ。 ◦体部外面・口縁部はヨコナデ。	◦口縁部にスス付着。 ◦灯明皿として使用。
21		中皿	8.8	2.0	◦体部はやや外反して立ち上がる。 ◦口縁部は外方向につまみ出して端部を丸くおさめる。 ◦内底面に沈線を有する。	◦体部内面・口縁部はヨコナデ。 ◦底部内面はナデ。 ◦体部外面は指頭圧痕。 ◦口縁部は指頭圧痕の後ナデ。	
22		中皿	10.5	2.0	◦やや凹む底部から体部は内弯して立ち上がる。 ◦口縁端部は丸くおさめる。	◦体部内面・口縁部はヨコナデ。 ◦底部内面はナデ。 ◦体部外面は指頭圧痕。 ◦口縁部は指頭圧痕の後ヨコナデ。	
23		大皿	13.6	2.1	◦体部は外反して立ち上がる ◦口縁部はつまみ上げ気味に丸くおさめる。	◦体部内面・口縁部はヨコナデ。 ◦底部内面はナデ。 ◦体部外面は指頭圧痕。 ◦口縁部は指頭圧痕の後ナデ。	
24		大皿	13.2	2.3	◦体部は内弯気味に直線的に立ち上がる。 ◦口縁部は肥厚して端部はやや尖り気味に丸くおさめる。	◦体部内面・口縁部はヨコナデ。 ◦底部内面はナデ。 ◦体部外面は指頭圧痕。 ◦口縁部はヨコナデ。	
25		中皿	8.0	2.2	◦体部はやや外反して立ち上がる ◦口縁端部は丸くおさめる。	◦体部内面・口縁部はヨコナデ。 ◦底部内外面はナデ。 ◦体部外面は指頭圧痕。 ◦口縁部はヨコナデ。	
26		中皿	9.0	1.7	◦体部は外反して立ち上がる ◦口縁端部は丸くおさめる。	◦体部内面・口縁部はヨコナデ。 ◦体部外面は指頭圧痕。 ◦口縁部は指頭圧痕の後ヨコナデ。	
27		大皿	12.2	2.3	◦体部は直線的に立ち上がるが口縁部は外反的。 ◦口縁端部は薄く尖る。	◦体部内面・口縁部はヨコナデ。 ◦底部内面はナデ。 ◦体部外面は指頭圧痕の後ナデ。 ◦口縁部はヨコナデ。	
28		大皿	13.2	2.6	◦体部は直線的に立ち上がる。 ◦口縁端部は尖がり気味に丸くおさめる。	◦体部内面・口縁部はヨコナデ。 ◦底部内外面はナデ。 ◦体部外面は指頭圧痕の後ナデ。 ◦口縁部はヨコナデ。	
29		大皿	11.8	2.7	◦体部は外反した後内弯して立ち上がる。 ◦口縁部はやや内側に屈曲して端部を丸くおさめる。	◦体部内面・口縁部はヨコナデ。 ◦底部内外面はナデ。 ◦体部外面は指頭圧痕の後ナデ。 ◦口縁部はヨコナデ。	
30		大皿	12.4	2.7	◦体部は外反した後内弯ぎみに立ち上がる。 ◦口縁端部は丸くおさめる。	◦体部内面・口縁部はヨコナデ。 ◦底部内外面はナデ。 ◦体部外面は指頭圧痕。 ◦口縁部は指頭圧痕の後ヨコナデ。	
31		大皿	12.0	2.7	◦体部は外反した後内弯ぎみに立ち上がる。 ◦口縁端部は丸くおさめる。 ◦内底面に沈線を有する。	◦体部内面・口縁部はヨコナデ。 ◦底部内面はナデ。 ◦体部外面は指頭圧痕。 ◦口縁部はヨコナデの後指頭圧痕。	

表3　軒丸瓦・軒平瓦観察表

軒丸瓦（cm）

番号	直径	内区		外区			色調	備考
		内径	巴文捲方向	珠文帯巾	外縁巾	外縁高		
1	17.0	9.9	右	1.7	2.0	1.3	暗灰	
2	－	7.6(復原)	左	1.3	1.7	0.9	暗灰	圏線を欠く
3	－	－	右	1.1	1.9	1.0	暗灰	
4	－	－	左	0.9	1.7	1.0	暗灰	
5	－	－	－	1.7	1.5	1.1	暗灰	
6	－	－	－	－	1.7	0.9	暗灰	朱文が小さく高い
7	－	－	－	1.0	1.4	0.6	灰白	

軒丸瓦（cm）

番号	瓦当				段顎		文様	色調	備考
	内区厚	上外区厚	下外区厚	脇区幅	幅	深さ			
8	2.7	1.3	1.2	1.1	3.0	2.6	唐草	暗灰	
9	2.1	0.7	－	－	2.5	1.3	連珠	暗灰	
10	2.4	1.8	1.8	1.7	3.2	2.8	連珠	暗灰	
11	2.2	0.8	1.1	1.3	2.3	2.4	唐草	黒灰	
12	2.0	1.8	1.2	1.7	2.4	2.4	唐草	暗灰	
13	2.3	1.3	1.6	－	2.7	2.6	唐草	灰白	
14	2.3	1.5	1.5	－	2.3	2.2	唐草	灰白	
15	2.1	1.2	1.1	－	2.3	－	波状	暗灰	
16	2.6	－	1.3	－	2.4	2.5	唐草	暗灰	
17	3.0	－	－	－	2.6	2.5	均整唐草	灰白	中心飾

表4　銅銭観察表（1）

	銭　種	初　鋳　年（西暦）		外径(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	備　　考
1	開元通宝	唐	高祖　武徳四年（ 621）	24.50	1.05	2.97	この欄は紐で結んだ状態で一括出土したものである。
2	〃			24.40	1.15	3.36	
3	〃			24.35	1.15	2.90	
4	〃			23.80	1.00	3.01	
5	〃			24.55	0.95	2.30	
6	乾元重宝		粛宗　乾元二年（ 759）	24.70	1.04	3.73	
7	至道元宝	北宋	太宗　至道元年（ 995）	24.80	1.01	3.24	
8	景徳元宝		真宗　景徳元年(1004)	24.20	1.00	3.24	
9	〃			24.20	1.10	2.98	
10	祥符通宝		仁宗　大中祥符二年(1009)	24.20	1.05	3.42	
11	天聖元宝		仁宗　天聖元年(1022)	24.40	1.05	3.24	
12	〃			24.75	1.35	3.57	
13	景祐元宝		仁宗　景祐元年(1034)	24.60	1.05	3.48	
14	皇宋通宝		仁宗　宝元二年(1039)	24.30	0.95	3.26	
15	〃			23.65	1.00	2.46	
16	〃			24.05	1.25	3.43	
17	〃			24.55	1.05	3.20	
18	〃			24.35	1.00	3.13	
19	〃			24.15	1.00	2.91	
20	〃			24.10	1.10	3.34	
21	〃			24.50	1.10	3.37	
22	嘉祐通宝		仁宗　嘉祐元年(1056)	24.15	1.10	3.30	
23	〃			23.70	0.95	2.75	
24	嘉祐元宝		仁宗　嘉祐元年(1056)	23.55	1.10	3.57	
25	治平元宝		英宗　治平元年(1064)	24.15	1.00	3.04	
26	〃			24.05	1.05	2.76	
27	熙寧元宝		神宗　熙寧元年(1068)	24.20	1.10	3.10	
28	〃			23.85	1.15	3.48	
29	〃			24.85	1.30	4.38	
30	元豊通宝		神宗　元豊元年(1078)	24.90	1.20	3.76	
31	〃			24.00	1.20	3.75	
32	〃			24.40	0.90	3.02	
33	〃			24.35	0.90	2.38	
34	〃			23.95	1.25	3.57	
35	〃			24.05	1.10	2.99	
36	〃			24.05	1.25	4.14	
37	〃			23.95	1.25	3.76	
38	〃			24.15	1.10	3.34	
39	〃			22.85	0.90	2.55	
40	〃			23.75	1.30	3.61	

表5　銅銭観察表　(2)

	銭　種	初　鋳　年（西暦）		外径(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	備　　考
41	元祐通宝	北宋	哲宗　元祐八年(1093)	24.50	1.05	2.97	
42	〃			24.40	1.15	3.36	
43	〃			24.35	1.15	2.90	
44	〃			23.80	1.00	3.01	
45	紹聖元宝		哲宗　紹聖元年(1094)	24.55	0.95	2.30	
46	〃			24.70	1.04	3.73	
47	元符通宝		哲宗　元符元年(1098)	24.80	1.01	3.24	
48	〃			24.20	1.00	3.24	
49	聖宋元宝		徽宗　建中靖国元年(1101)	24.20	1.10	2.98	
50	〃			24.20	1.05	3.42	
51	政和元宝		徽宗　政和元年(1111)	24.40	1.05	3.24	
52	〃			24.75	1.35	3.57	
53	宣和通宝		徽宗　宣和元年(1119)	24.60	1.05	3.48	
54	永楽通宝	明	成祖　永楽六年(1408)	24.30	0.95	3.26	
55	景徳元宝	北宋	真宗　景徳元年(1004)	24.05	1.25	3.43	この欄は各々単独で出土したものである。
56	天禧通宝		真宗　天禧二年(1018)	24.55	1.05	3.20	
57	景祐元宝		仁宗　景祐元年(1034)	24.35	1.00	3.13	
58	紹聖元宝		哲宗　紹聖元年(1094)	24.15	1.00	2.91	
59	〃			24.10	1.10	3.34	
60	聖宋元宝		徽宗　建中靖国元年(1101)	23.65	1.00	2.46	

表6　土製品観察表

番号	品　名	法　　量(mm)	備　　考
32	土 人 形	53×49	僧形。椅子の裾の一部が欠損するが、ほぼ完形である。成形は前後より押圧による。左手に払子を持つ。衣には墨、椅子には赤の痕跡あり。
33	土　　鶏	41×42×3	頭部は欠損しているが鶏であろう。成形は左右より押圧した型作りである。表面凹部に銀粉の付着がみられる。
34	土　　鈴	44×23×2	袋部は欠損。一部に赤色顔料が残る。
35	土　　鈴	42×20×2	袋部は欠損。一部に赤色顔料が残る。
36	墨書土器	81×16	土師皿の裏面に人面を描き、縁辺に「妙寂尼」と墨書する。斎宮跡に類例がある。
37	瓦 製 品	120×27	完成品。使用目的不明。

表7　木製品観察表

番号	品名	法量(mm)	備考
15	鋤	(身)205×56×18 (柄)1011×30	身と柄を別材で作る「着柄鋤」で、釘二本と巻き紐二ケ所で固定して使用されていた。紐と釘一本は欠落。金属刃部の有無は不明。
17	柄	199×22	大部分を欠落する。先は2cm辺より切り込んで先端部を作り出している。
21	燭台	40×6	円盤のみ残る。
16	人形	200×20×16	下部を欠落する。
18	不明木製品	118×19×7	両面四方より先端部を作り出している。使途不明。
22	火付棒	73×13	先端部に炭化痕が残る。
28	箸	169×6	合計8点出土。
23	刀子柄	136×25×6	一対をなす。目釘孔を穿ち、固定には巻き紐二ケ所による。
27	刀子柄	115×21×3	片方のみ。目釘孔を穿ち、固定には巻き紐二ケ所による。
19	木球	45×62	完成品、毬打の球。
20	木球	53×46	未成品 3/5欠損。
26	櫛	90×52	漆塗とみられるが剝落している。
25	漆器椀	(器高)39mm残存	外面は黒漆仕上げ。内面黒漆の上に朱漆仕上げ。
24	漆器椀	136×60	内外面とも黒漆仕上げ。内面見込みに朱漆で鳥を描く。
29	不明木製品	171×20×6	使途不明。
30	不明木製品	98×16×3	使途不明。
31	不明木製品	82×17×5	使途不明。

表8　金属製品観察表

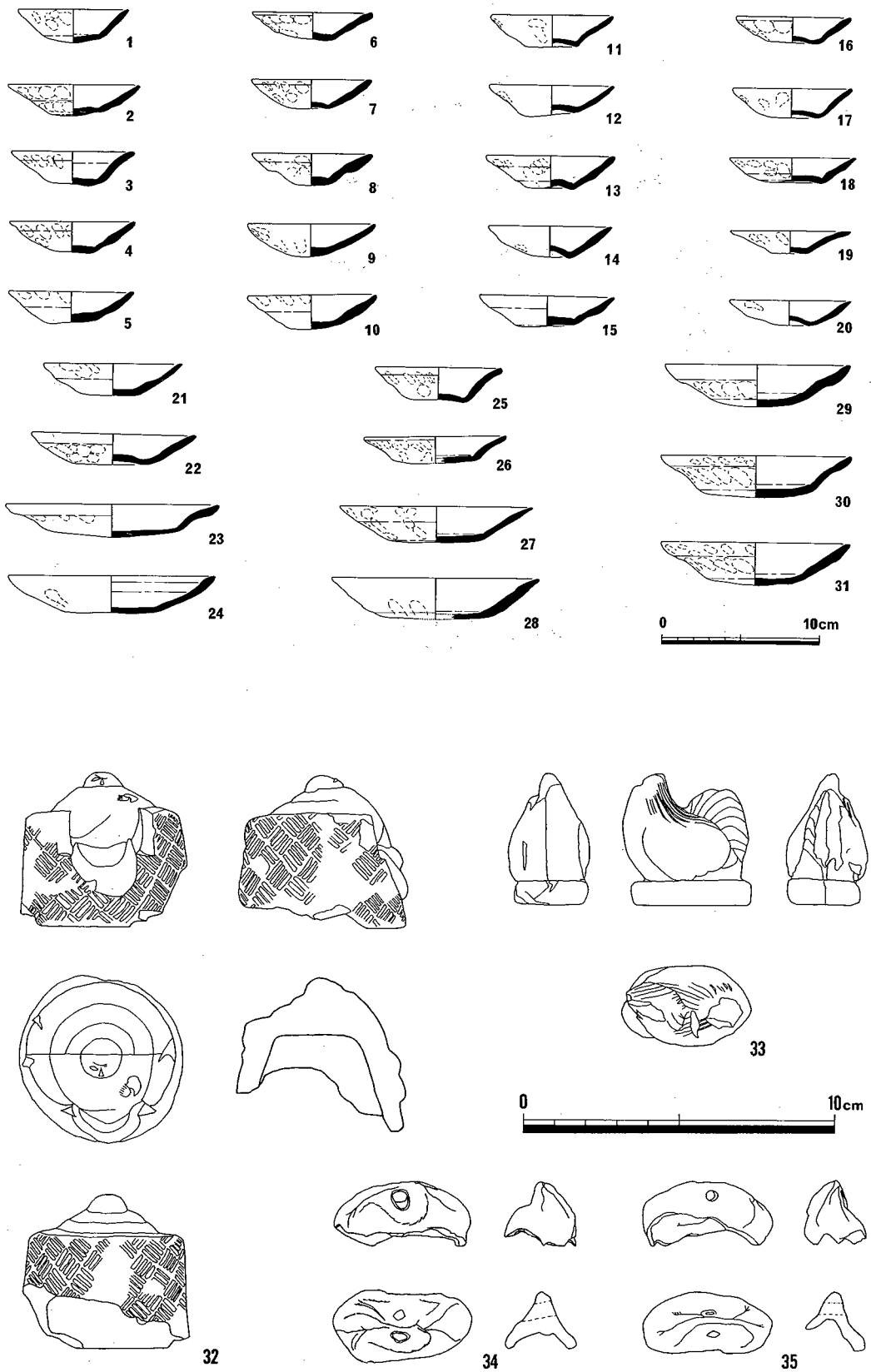
番号	品名	法量(mm)	備考
61	刀子	150×14×3	全面にわたって腐蝕する。 刃部磨耗。
62	刀子	175×13×3	腐蝕のため読み難いが銘の一部が認められる。 火に罹ったものとみられる。
63	刀子	187×15×3	刃部少し磨耗、ほぼ全面にわたり腐蝕が認められる。
64	釘隠	49×17×1	14弁菊花形。銅製。
65	刀子	46×14×4	刃部欠落。全面腐蝕。朱が付着する。

表9　柿経観察表　（法華経を書写したものである）

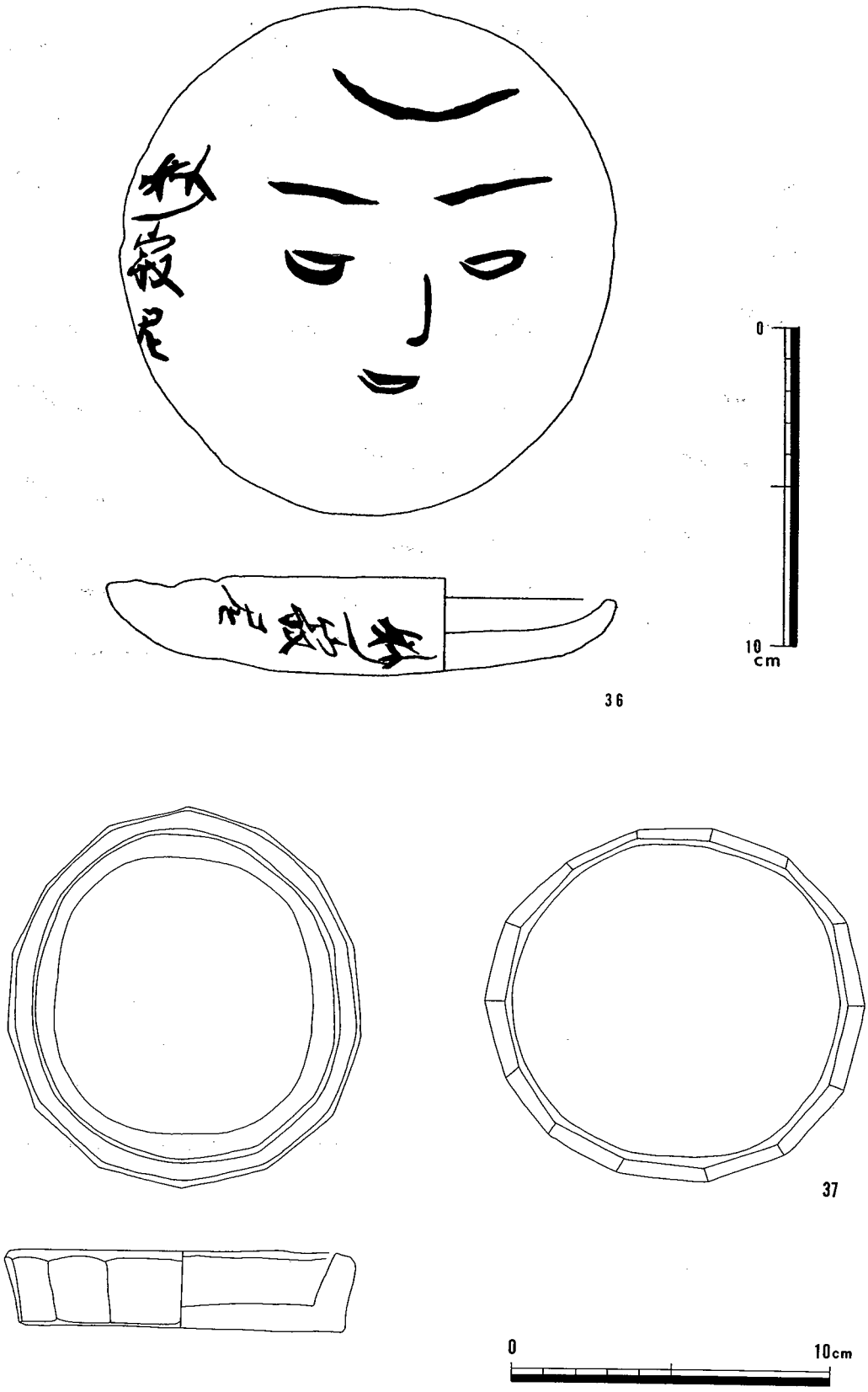
	経　　文	品	幅(cm)	備　　考
1	⌋為諸比⌊	無量義経説法品第二	1.3	13と表裏をなす
2	⌋十小劫不起于麻座⌊	妙法蓮華経序品第一	2.0	「麻」は「座」を書き誤って下に書き直している
3	⌋能知是⌊	方便品第二	1.3	10と表裏をなす
4	⌋衆生喜心⌊	譬喩品第三	2.1	「心喜」を「喜心」と書き誤っている
5	⌋共神通道力成□□□□度衆生皆因提婆⌊	提婆達多品第十二	2.6	
6	⌋説於妙法恒河沙衆□□□□□□□□衆生発縁⌊	提婆達多品第十二	2.4	
7	⌋曇弥我先総説一切⌊	勧持品第十三	2.5	
8	⌋爾時摩訶波闍波提比丘尼及耶輸陀⌊	勧持品第十三	2.4	
9	⌋住忍故智者⌊	安楽行品第十四	2.0	
10	⌋諸功徳⌊	安楽行品第十四 or分別功徳第十七	1.3	3と表裏をなす
11	⌋諸仏従無量千万億⌊	従地湧出品第十五	1.3	14と表裏をなす
12	⌋勒菩薩善哉⌊	従地湧出品第十五	2.1	
13	⌋応以比丘⌊	観世音菩薩普門品第二十五	1.3	1と表裏をなす
14	不　明	不　明	1.3	11と表裏をなす「未」「代」「念」のみ確認しうる。
15	不　明	不　明		16と表裏をなす「是」のみ確認しうる。
16	不　明	不　明		15と表裏をなす旁の「者」のみ確認しうる。
17	⌋佛⌊	不　明	1.9	「佛」のみ確認しうる。
18	不　明	不　明		
19	不　明	不　明		
20	不　明	不　明		「所」のみ確認しうる。
21	不　明	不　明		「云」偏のみ確認しうる。
22	不　明	不　明		
23	不　明	不　明		「等」のみ確認しうる。
24	不　明	不　明		旁の「者」のみ確認しうる。
25	⌋凡却名⌊	不　明		「凡却名」のみ確認しうる。
26	不　明	不　明		「閻」か？「聞」か？
27	⌋守近⌊	不　明		「守近」のみ確認しうる。
28	不　明	不　明		「糸」偏のみ確認しうる。

表10　絵馬観察表

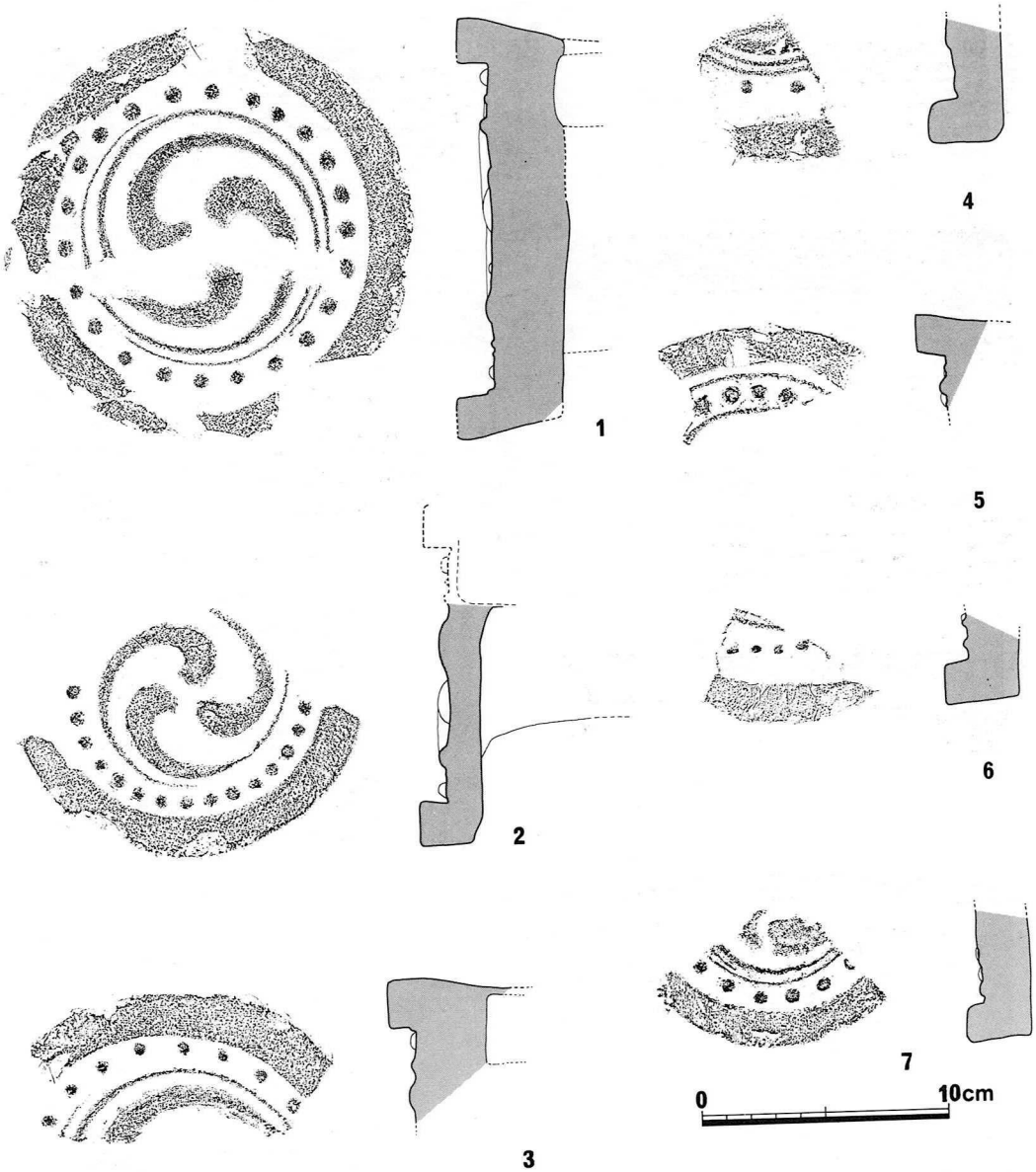
番号	図柄	縦 (cm)	横 (cm)	厚 (cm)	備考
1	馬	2.1	9.5	1.5	略画体にて墨で描く。
2	不明	2.3	9.4	1.3	墨描の痕跡あり。
3	不明	3.5	7.8	3.1	墨描の痕跡あり。
4	白馬	3.8	8.2	2.7	馬を白色で描き手綱、尻繋、尾を墨で描く、鞍から障泥にかけては、顔料剝落のため不明。馬の前に人物像らしきものもみられるが、不鮮明で確認しえない。
5	馬	2.4	8.5	0.7	略画体にて墨で描く。
6	不明	2.8	9.4	1.1	墨描の痕跡あり。
7	不明	2.8	9.1	2.0	両面に墨描の痕跡。
8	不明	1.3	9.3	1.0	墨描の痕跡あり。図柄については不明。
9	不明	3.2	8.2	2.2	肉眼では観察不可能。
10	不明	1.4	5.3	1.1	墨描の痕跡。
11	馬	5.5	5.9	2.1	略画体にて墨で描く。朱色にて彩色。
12	不明	4.3	7.6	2.0	肉眼では観察不可能。
13	不明	2.1	9.3	1.4	墨描の痕跡。
14	馬	7.5	9.0	8.5	板については、唯一完型品。図柄についてはかろうじて馬の全体像で観察しうるが、彩色等については不明。



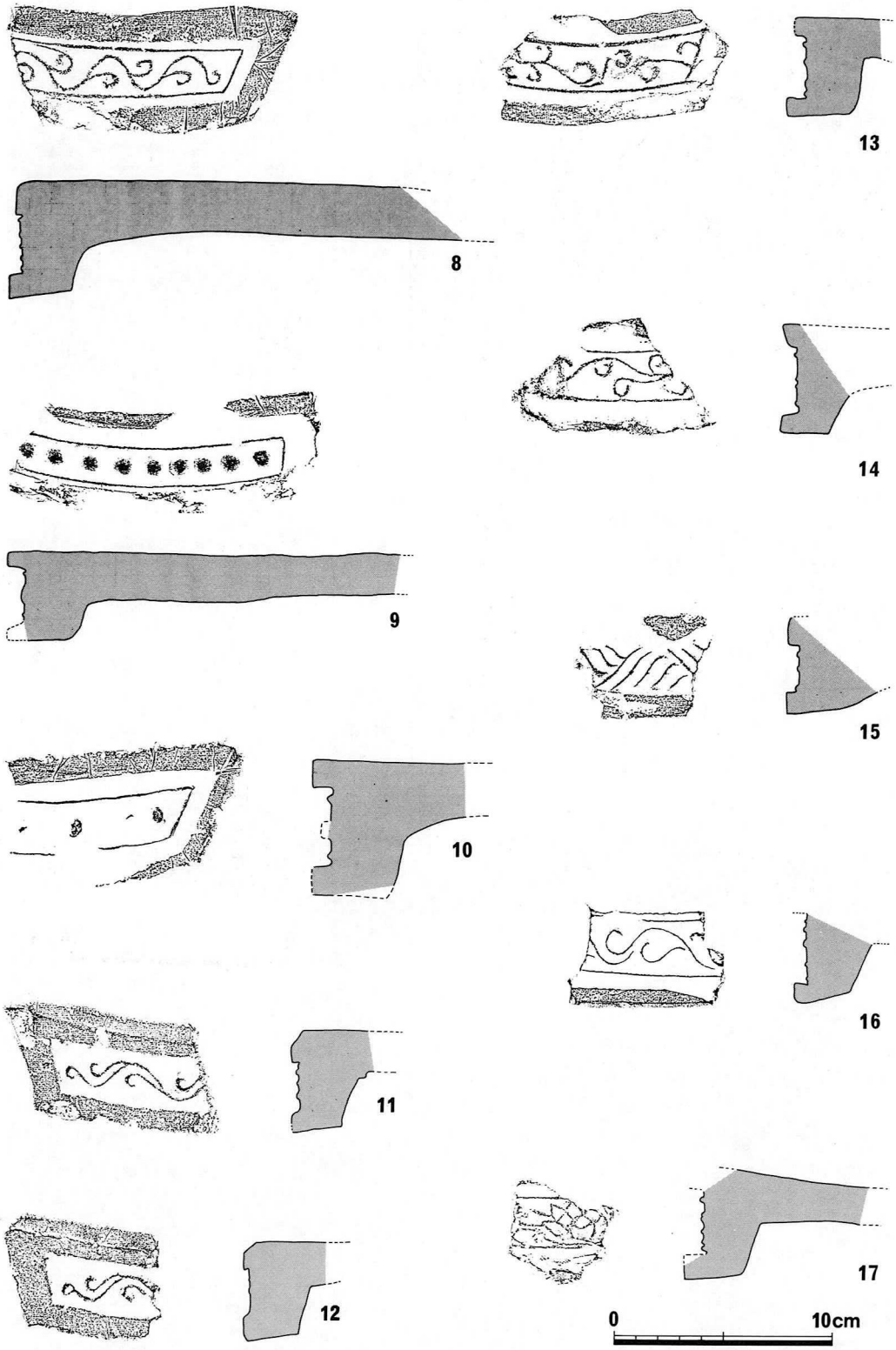
第４図　出土遺物実測図（土器・土製品）



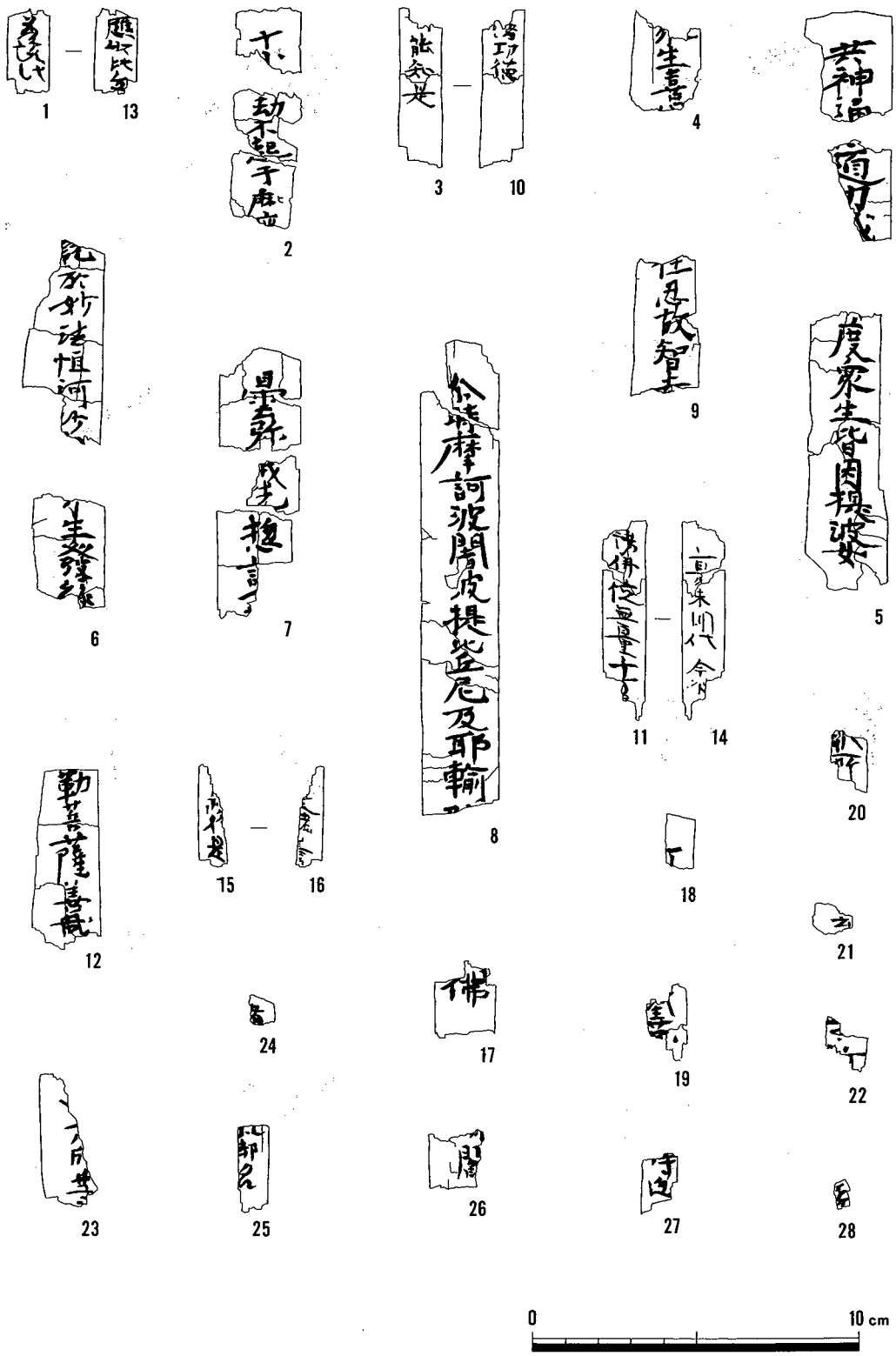
第５図　遺物実測図（人面墨書土器・不明瓦製品）



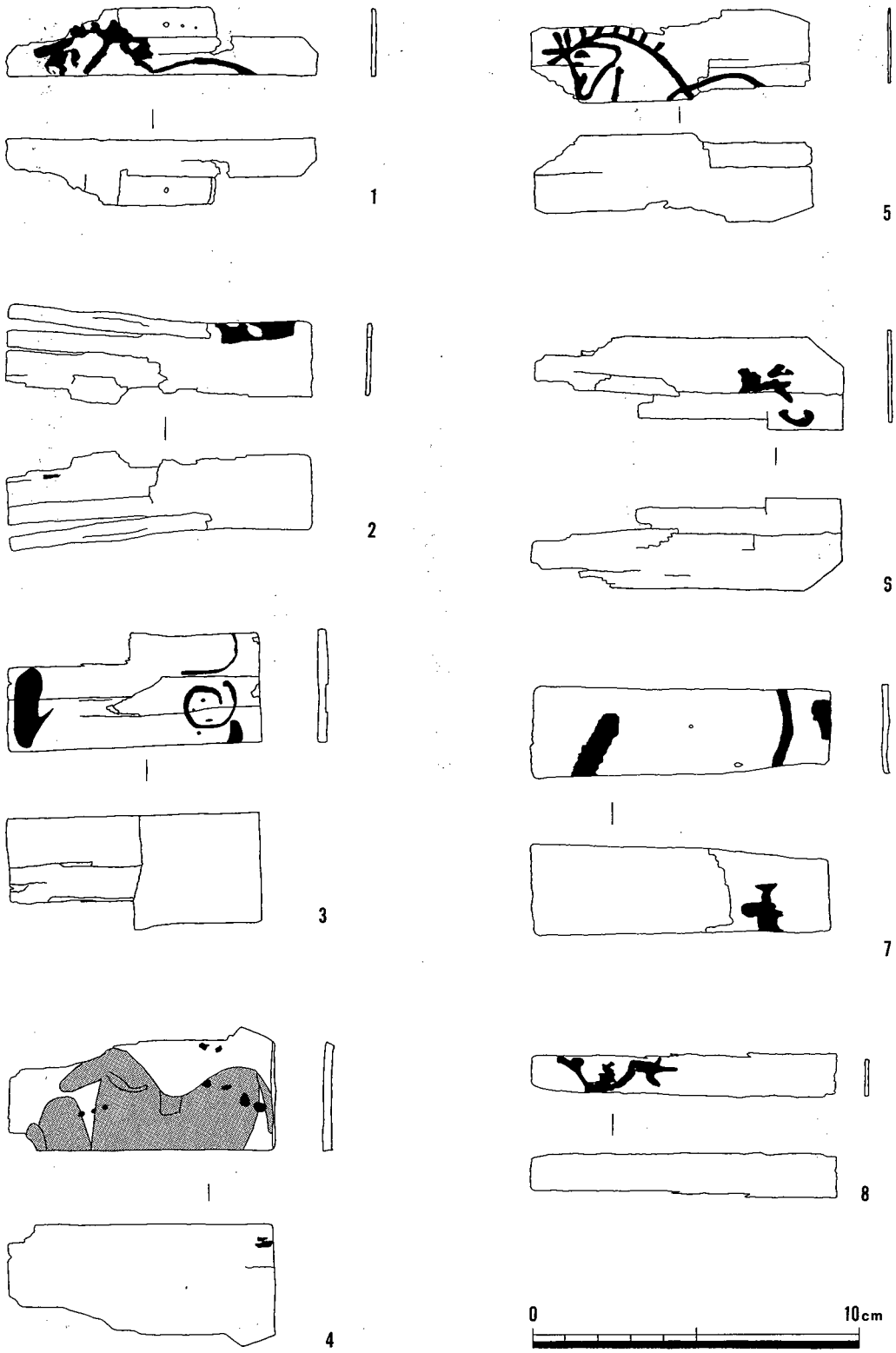
第6図　遺物実測図（軒丸瓦）



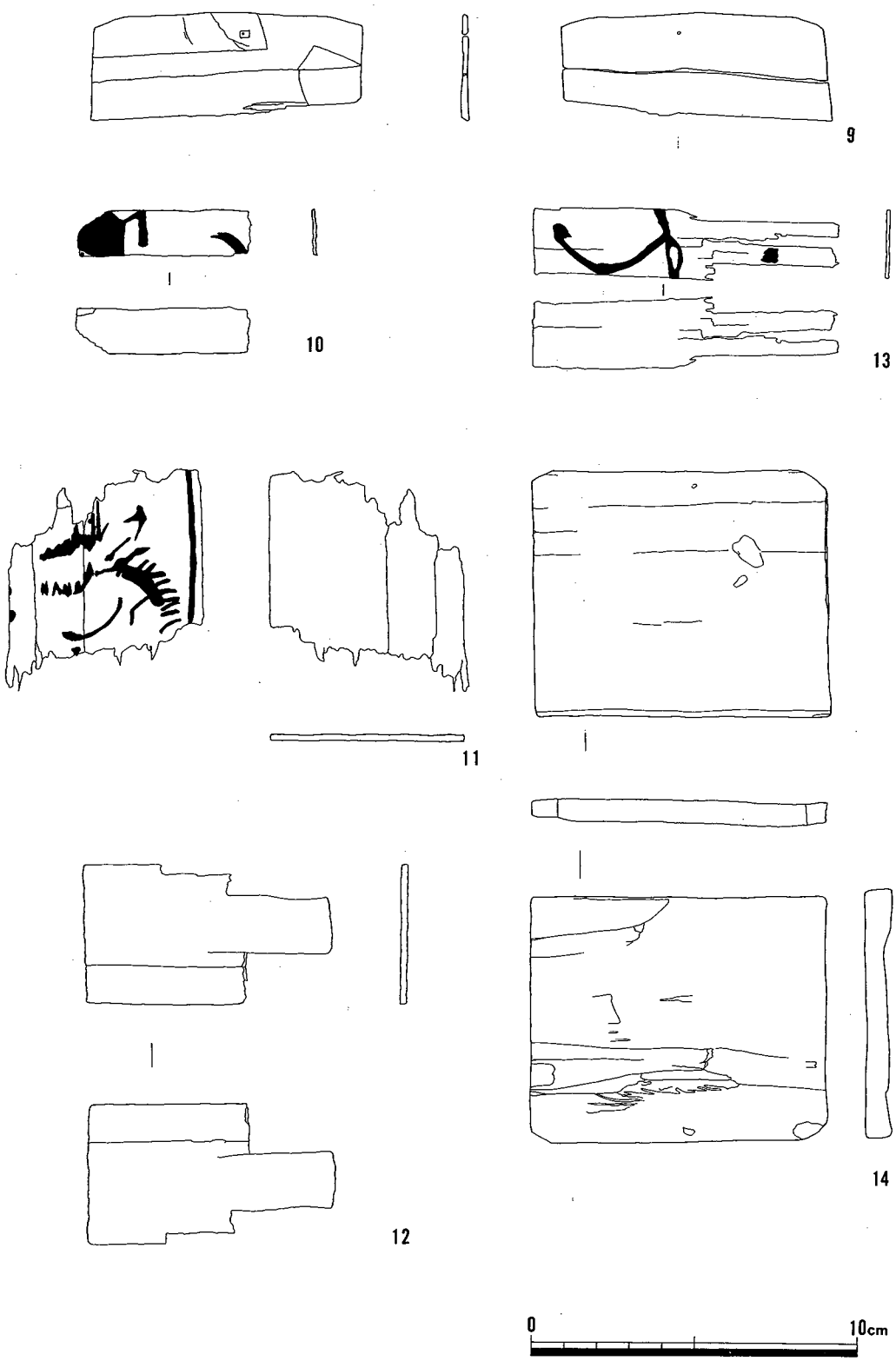
第７図　溝１　出土遺物実測図（軒平瓦）



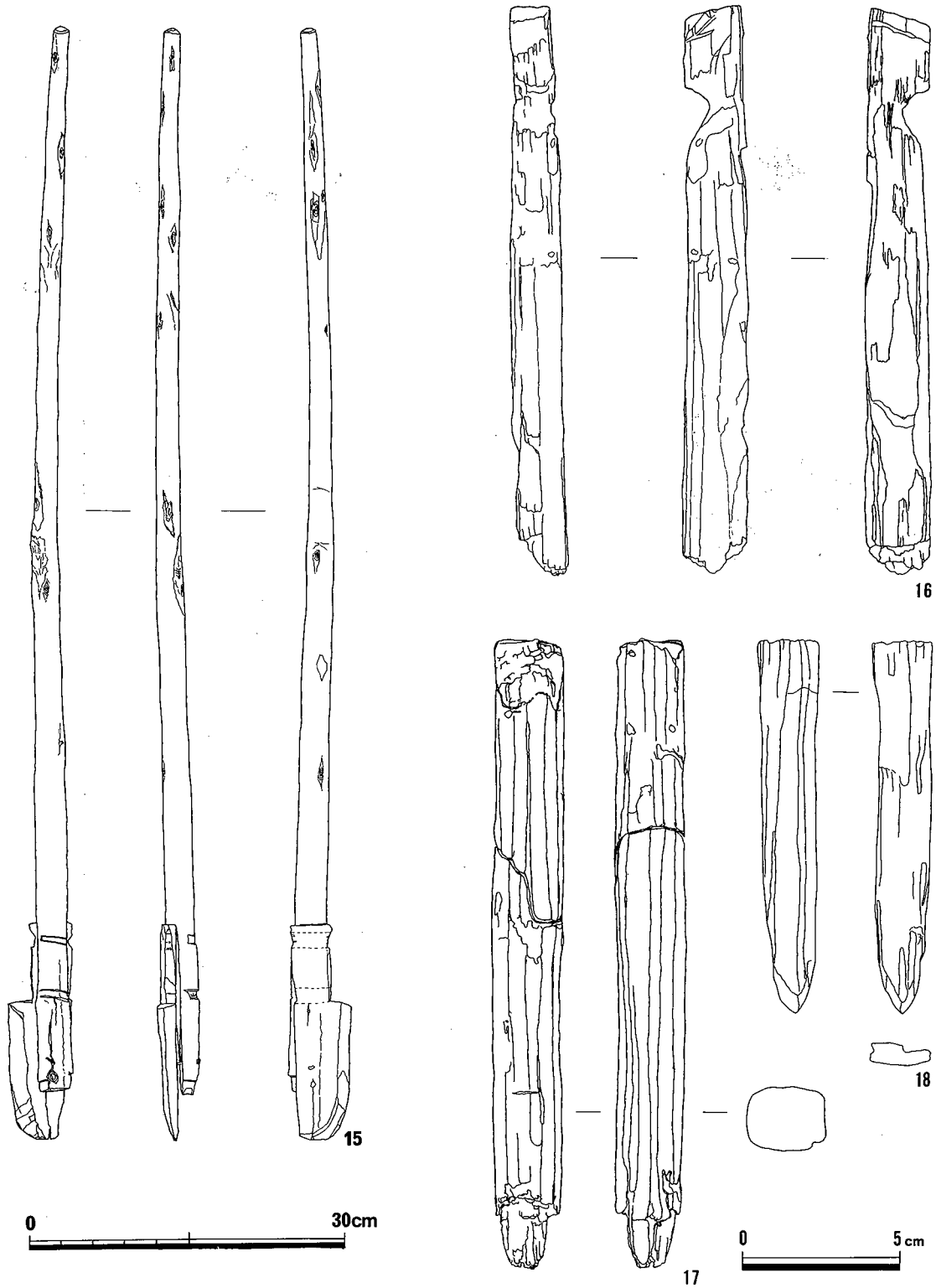
第８図　溝１　出土木製品実測図（柿経）



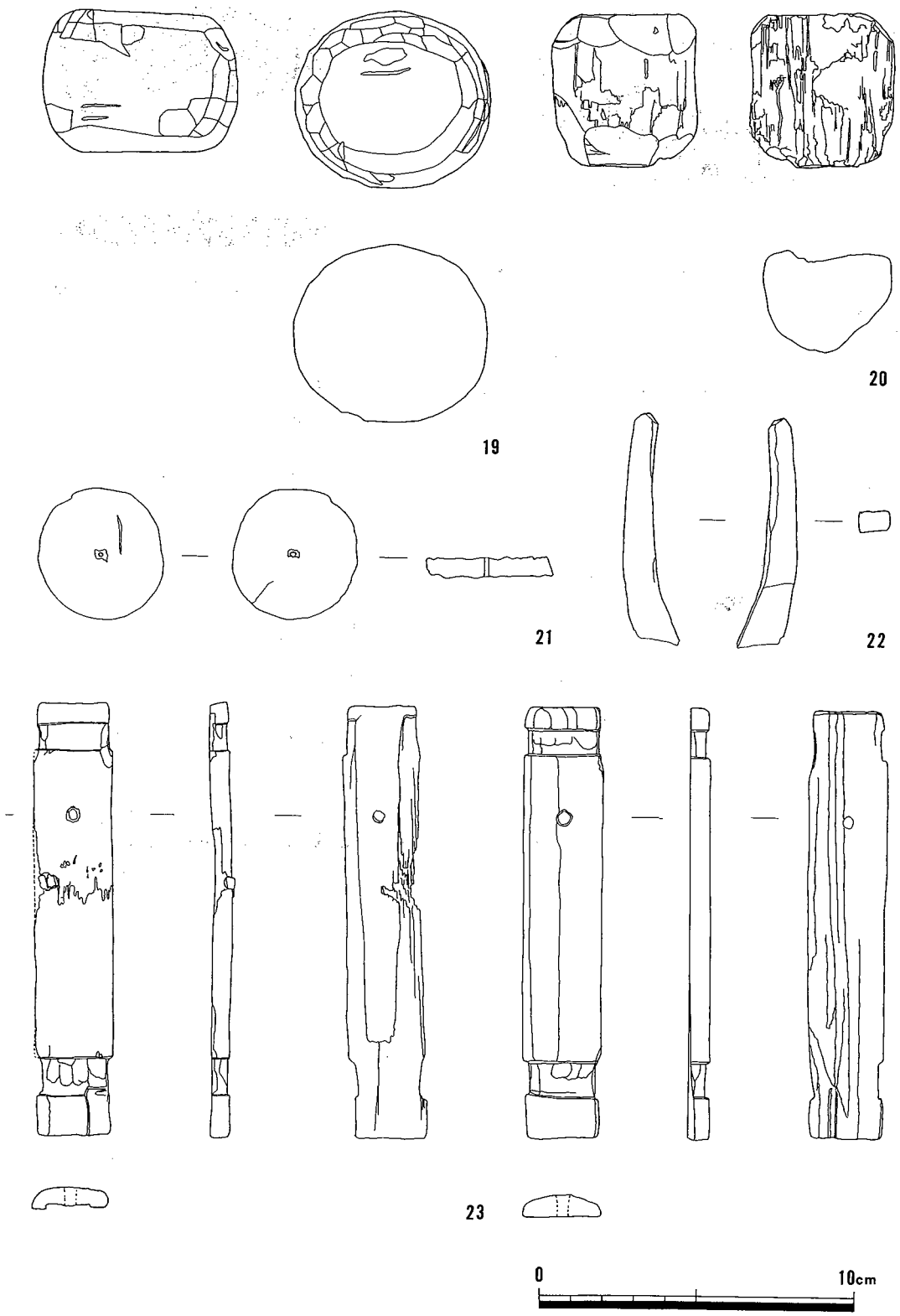
第９図　出土木製品実測図（絵馬）



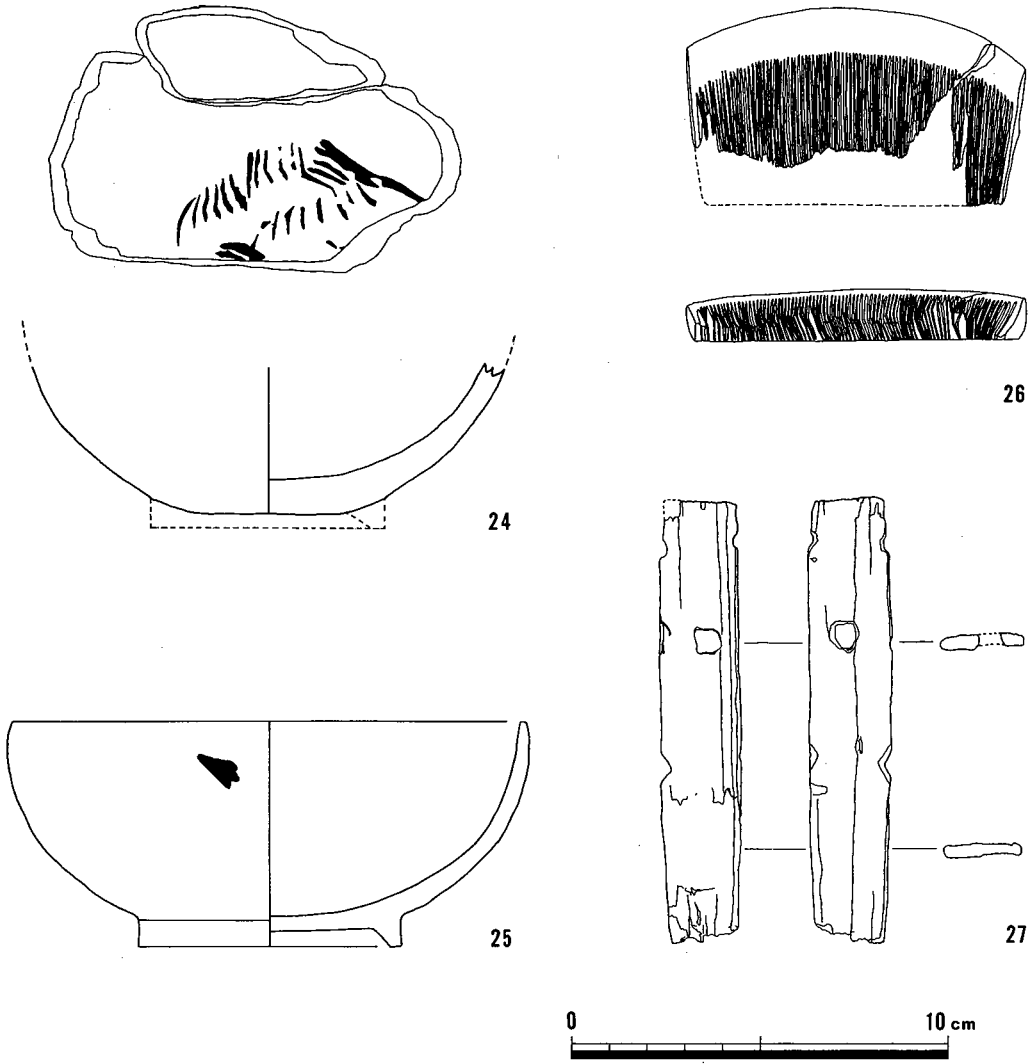
第10図　出土木製品実測図（絵馬）



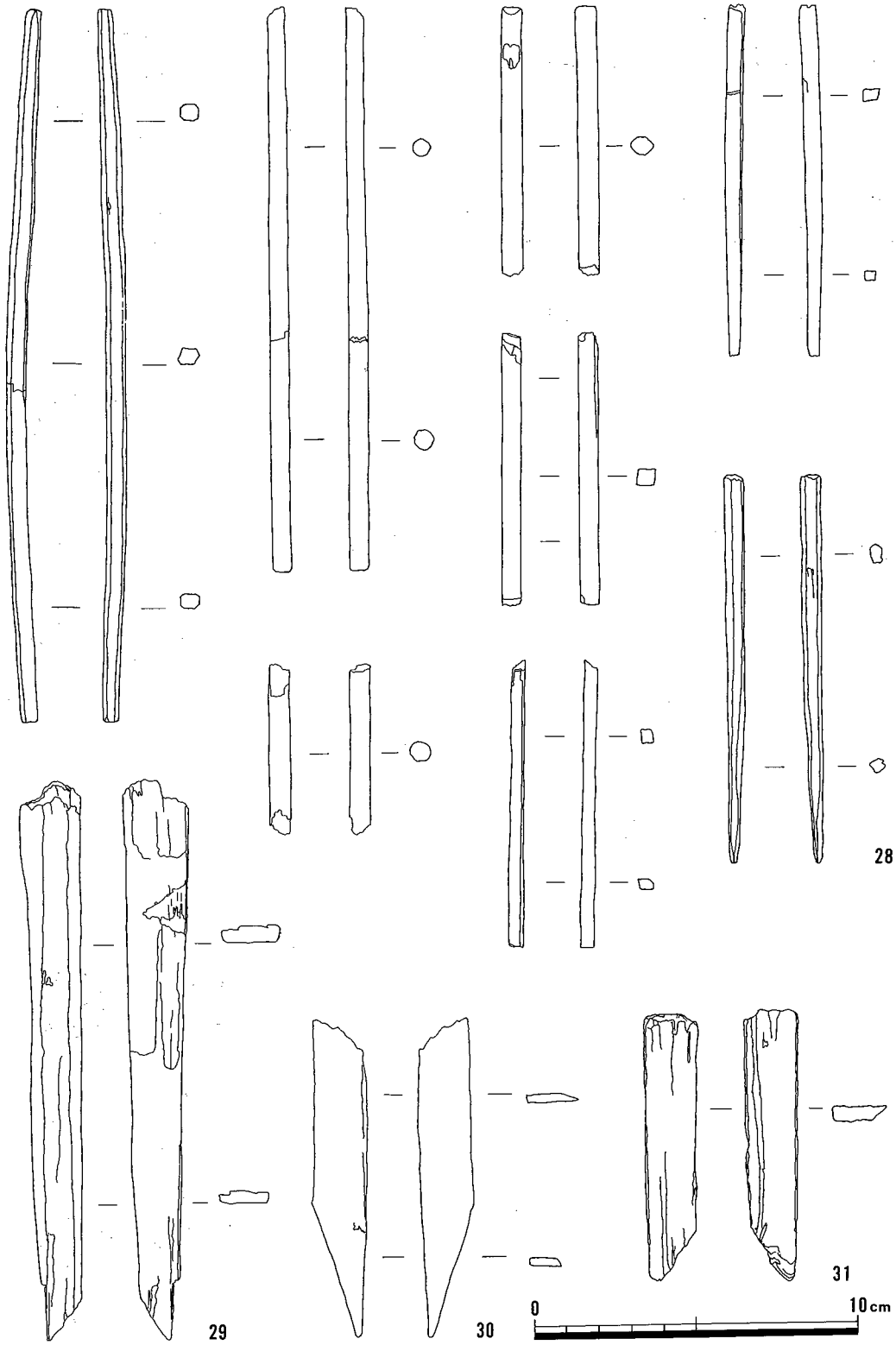
第11図　出土木製品実測図（鋤・不明）



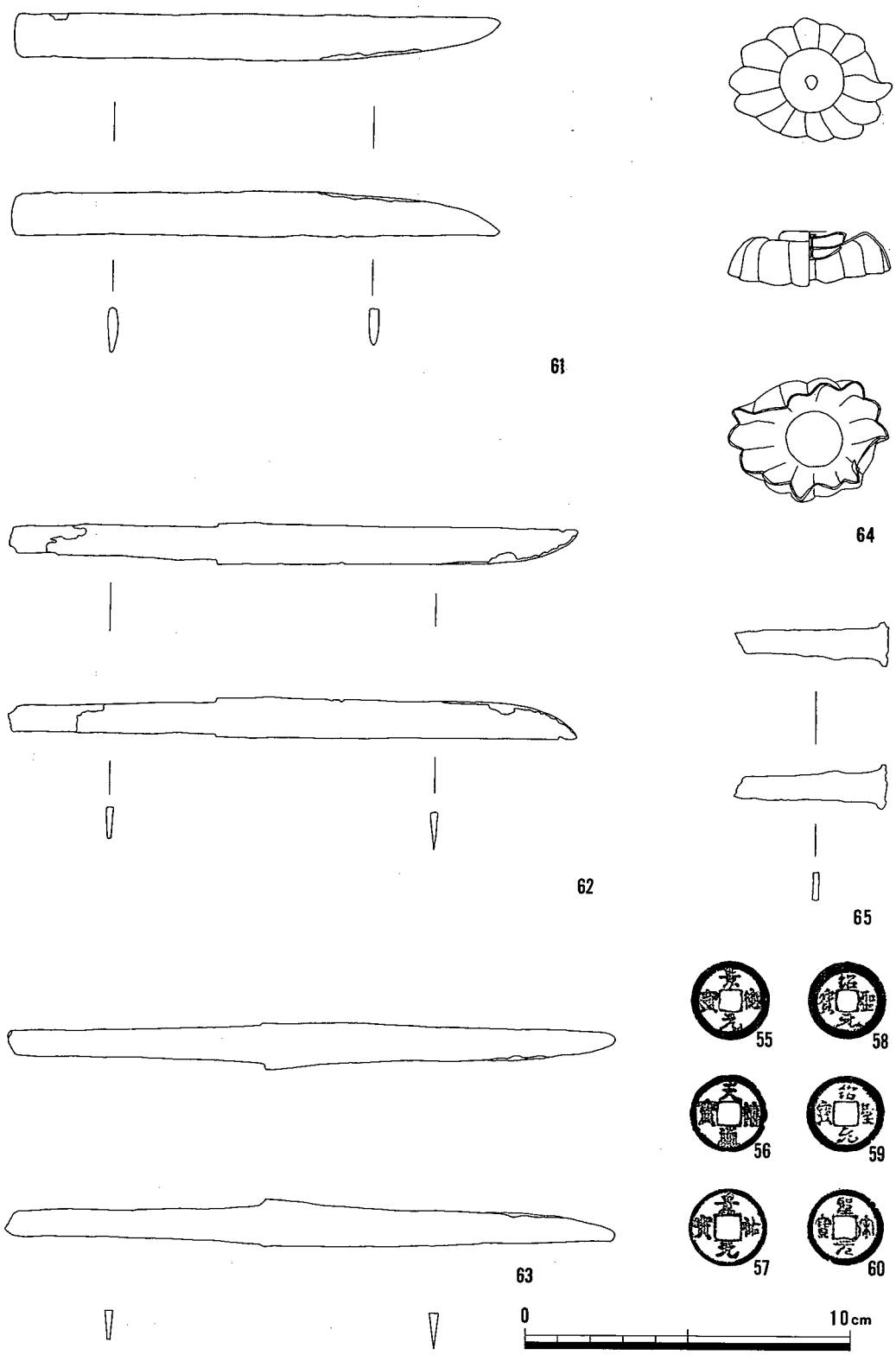
第12図　出土木製品実測図(毬打の球・燭台の一部・火つけ棒・刀子束)



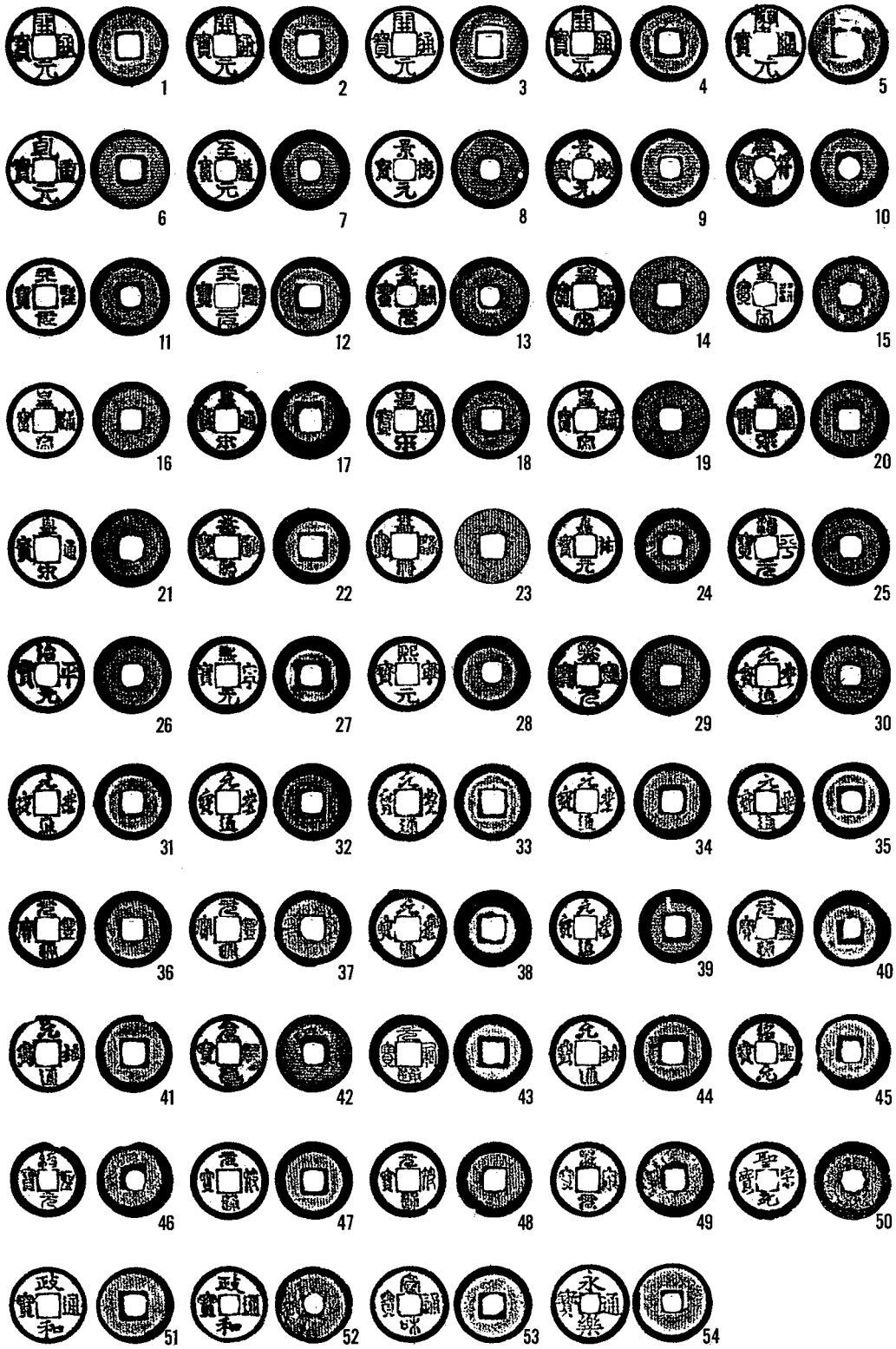
第13図　溝１　出土木製品実測図（漆器椀・櫛・不明）



第14図　出土木製品実測図（箸・不明）

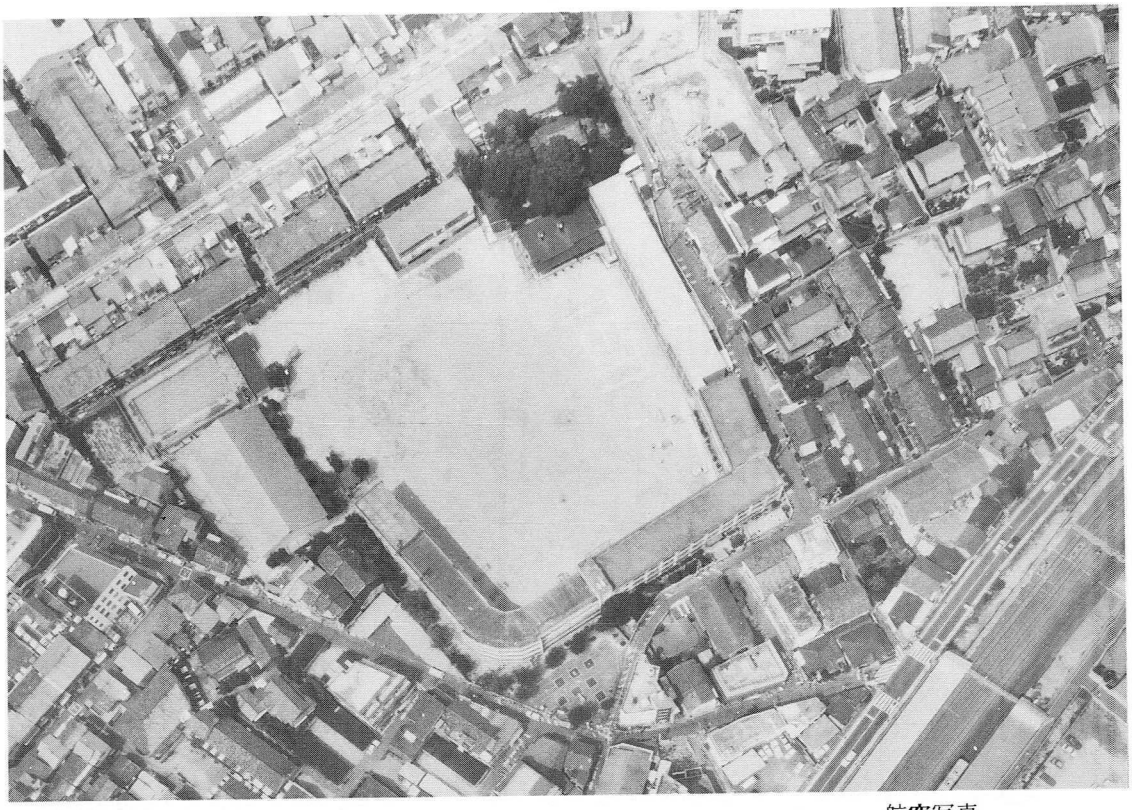


第15図　溝１　出土金属製品実測図（刀子・釘隠・銅銭）



第16図　溝１　出土銅銭拓影

図　　版

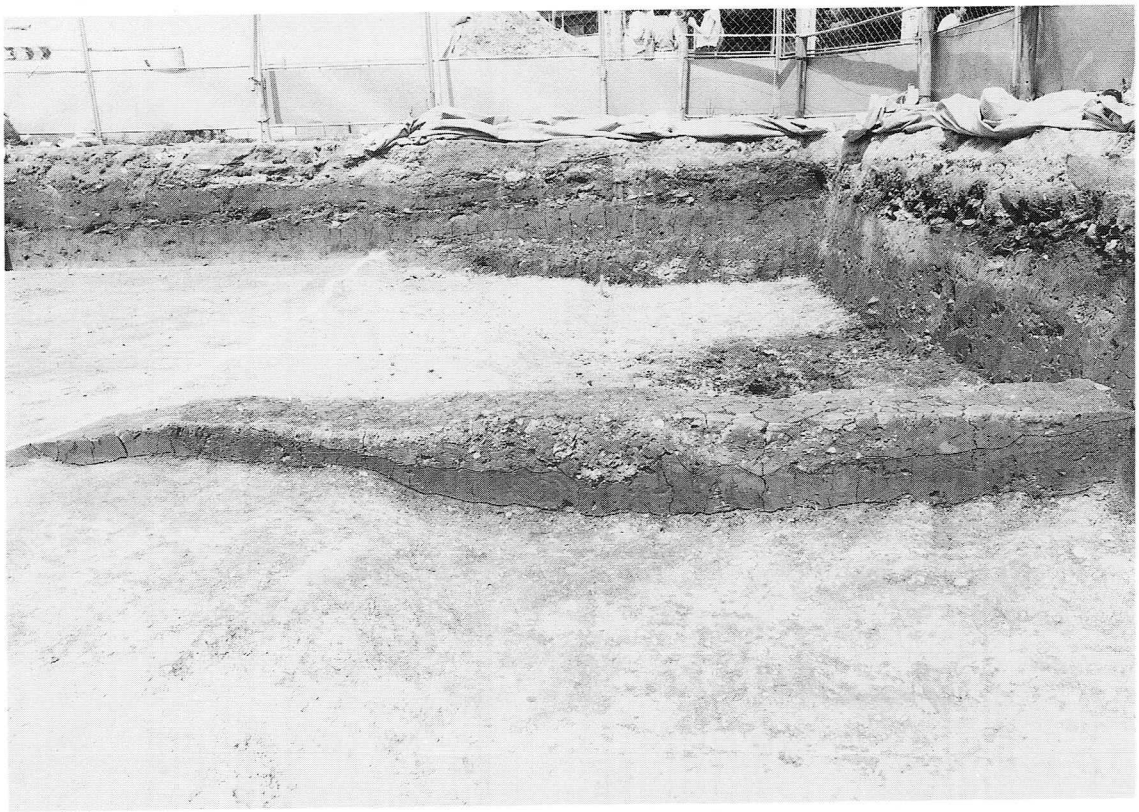


航空写真

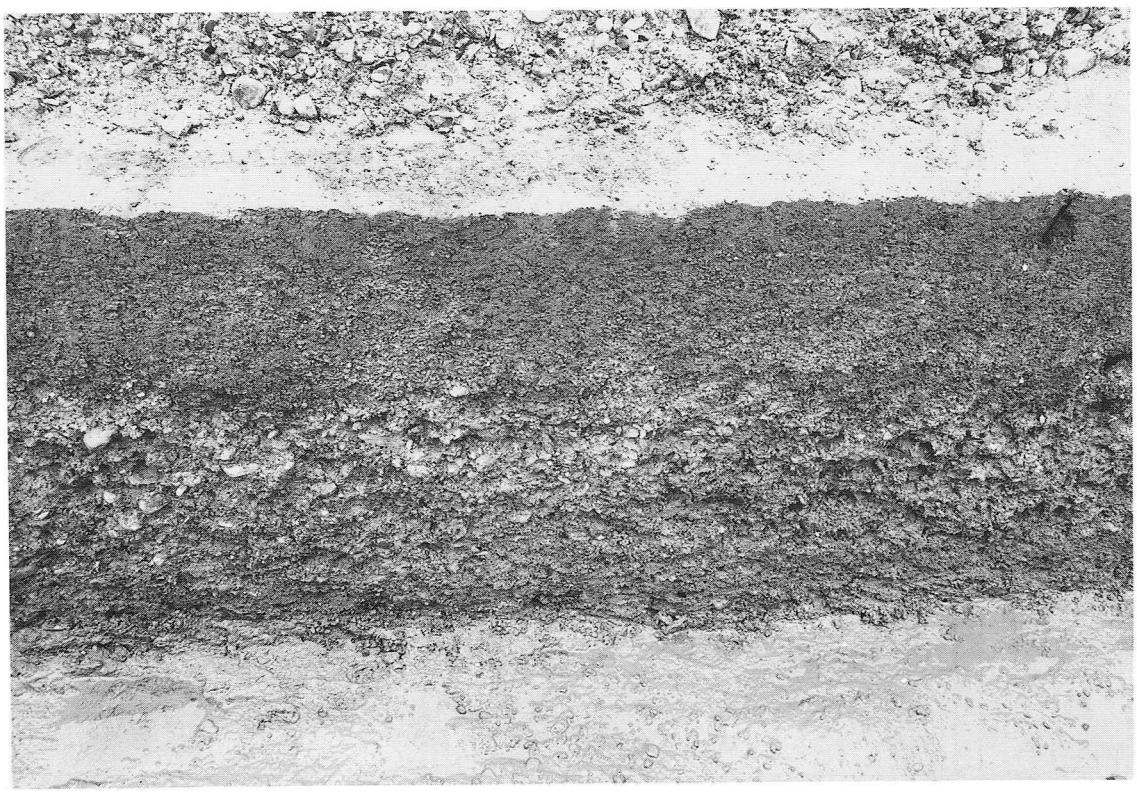
A地区　西から

寺院南端の溝コーナー

寺院南端の溝

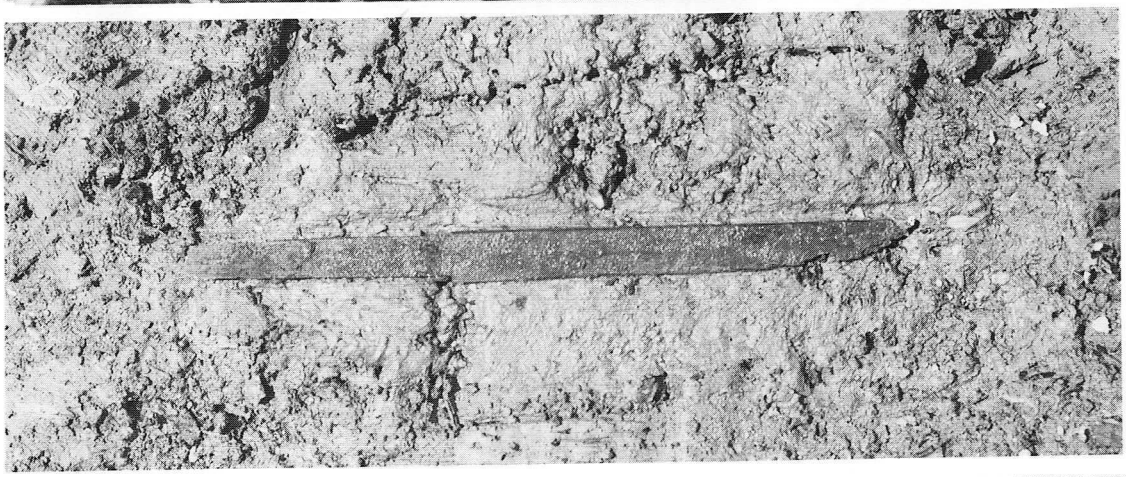


寺院南端の溝セクション



拳大の礫を含む砂礫層

図版4　遺物出土状況



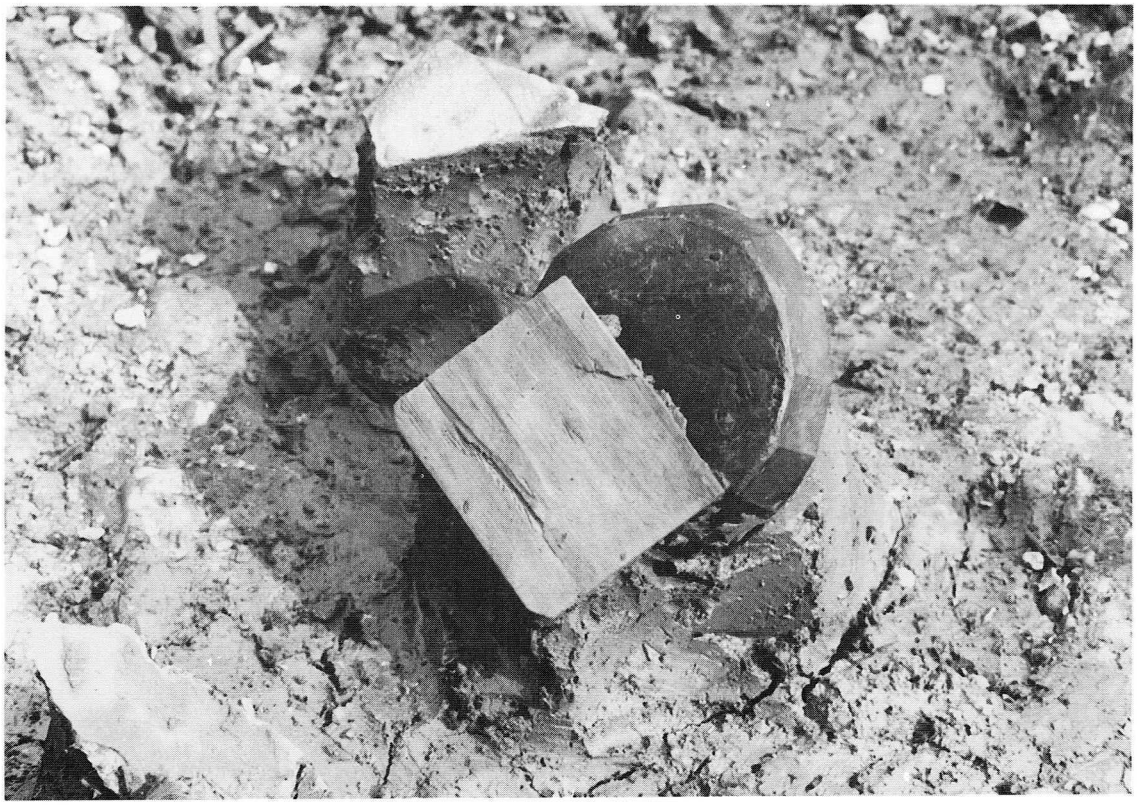
刀子（上・中）・銅銭（下）

図版5　遺物出土状況

鋤

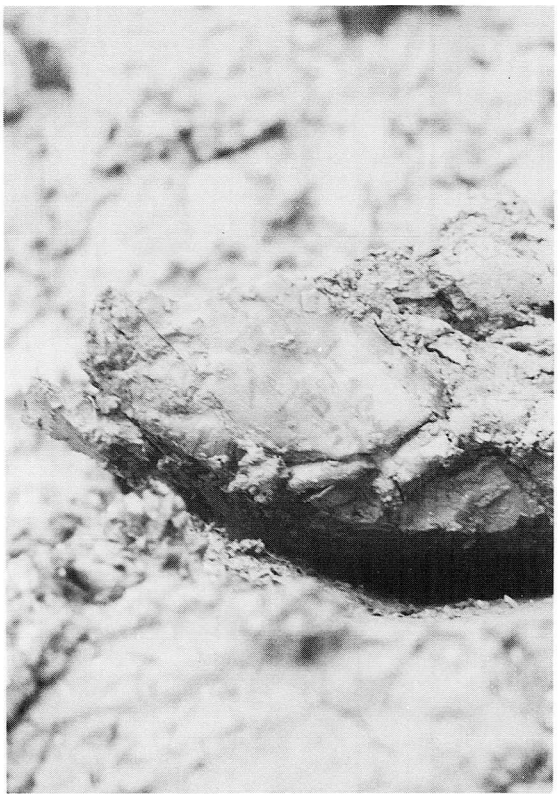
漆器椀

漆器椀



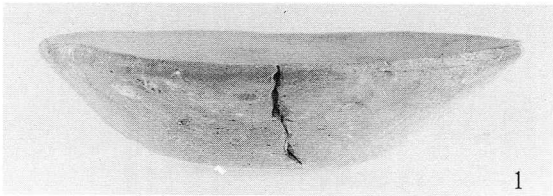
絵馬と不明瓦製品

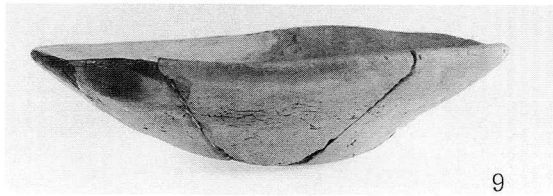
毬打の球

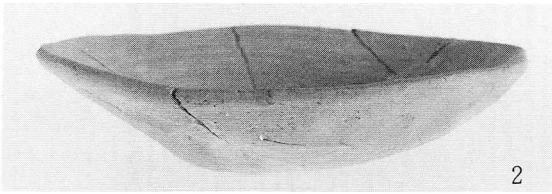


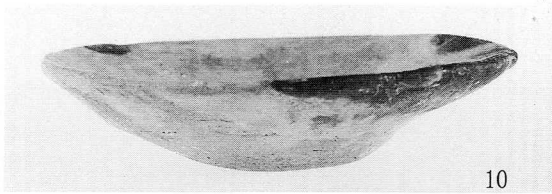
柿　経

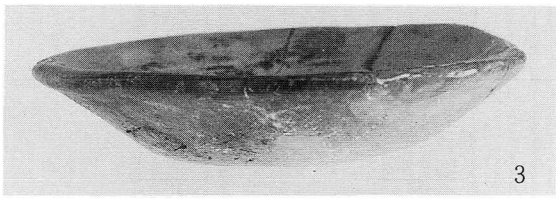
図版7　溝1出土遺物　土師質皿

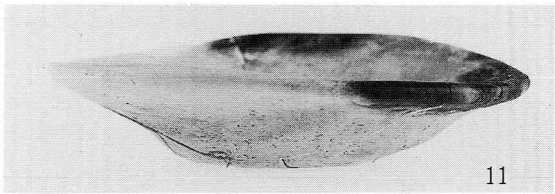

1

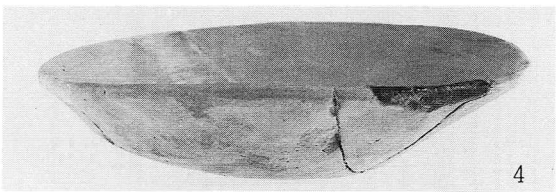

9

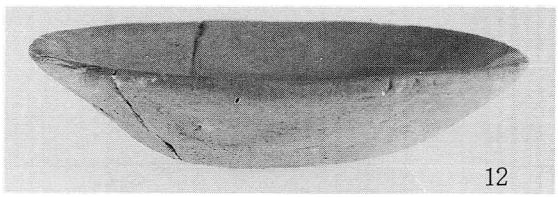

2

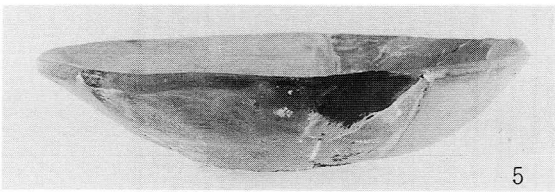

10

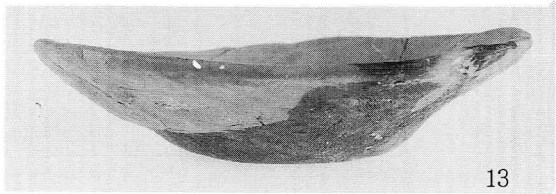

3

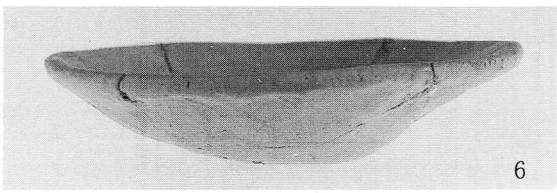

11

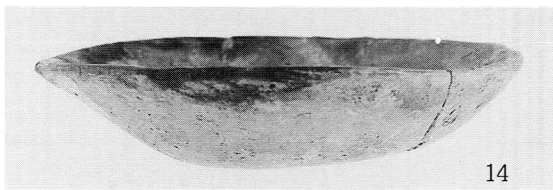

4

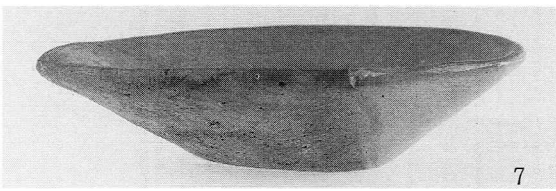

12

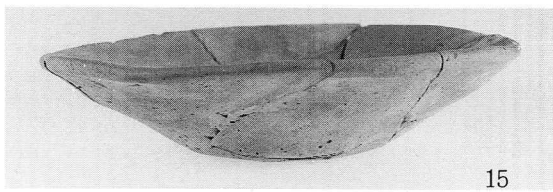

5

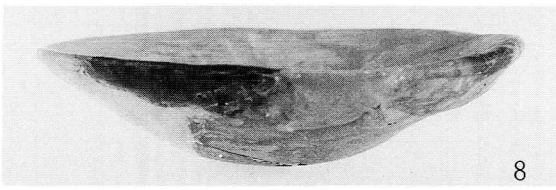

13

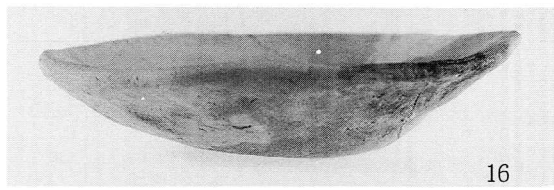

6


14

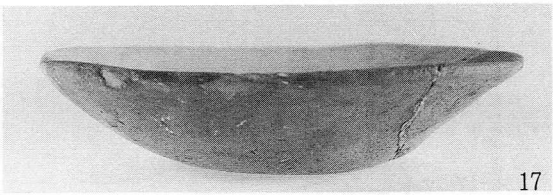

7

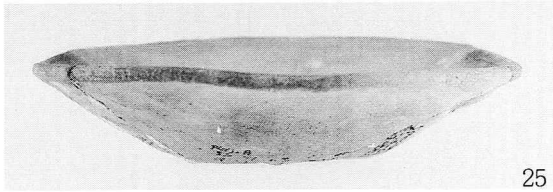

15

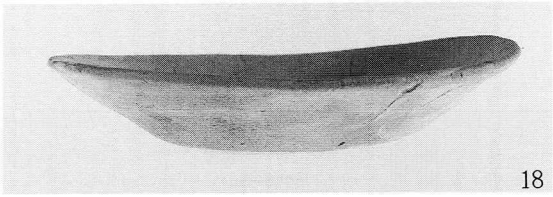

8

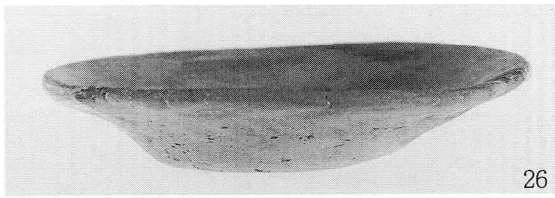

16

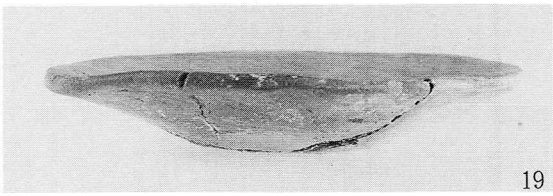
図版8　溝1出土遺物　土師質皿

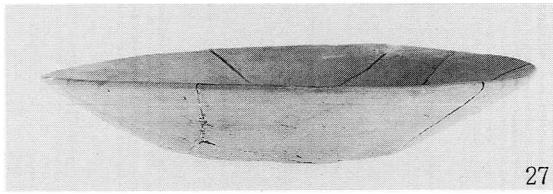

17

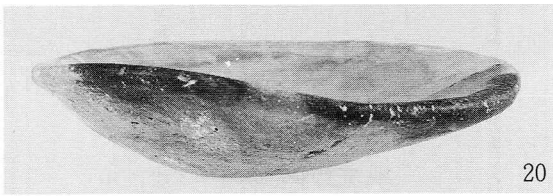

25

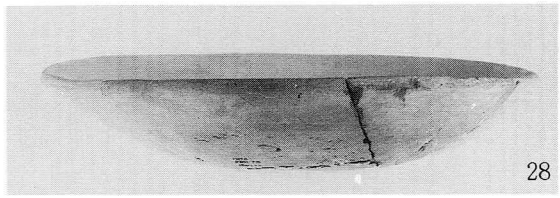

18

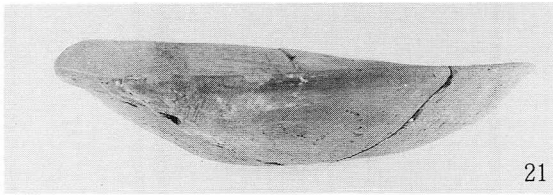

26

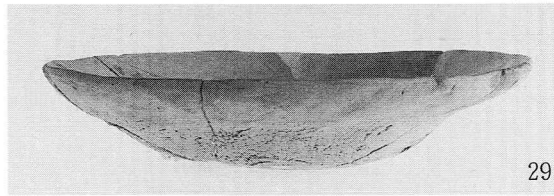

19

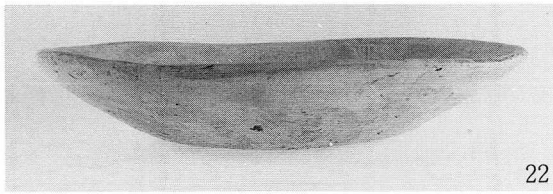

27

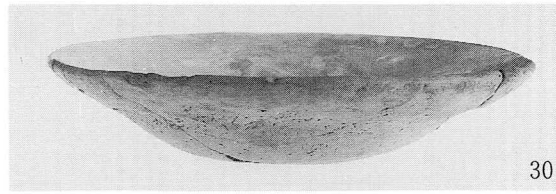

20

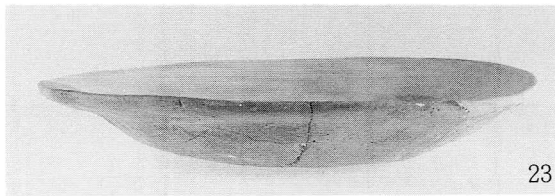

28

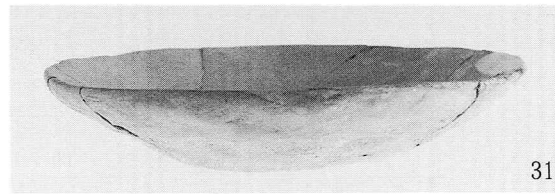

21

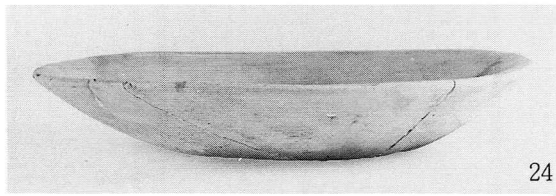

29


22


30

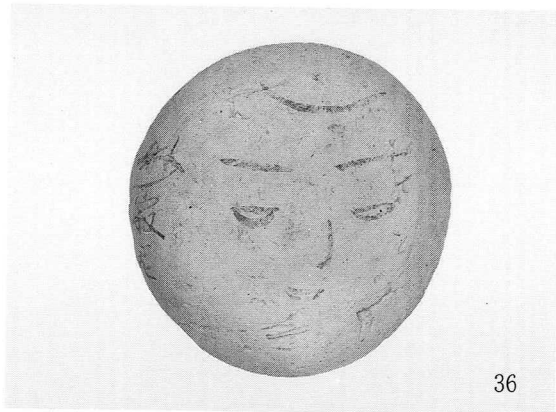

23


31

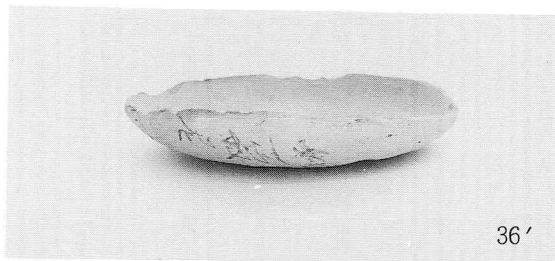

24

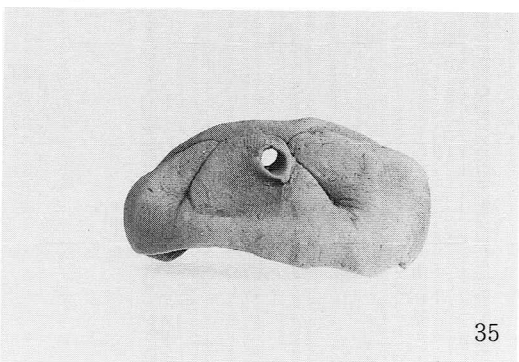
図版9　溝1出土遺物

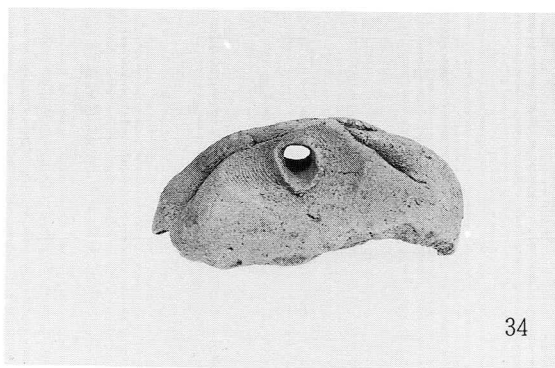
32

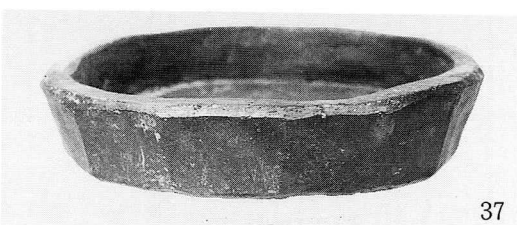

36

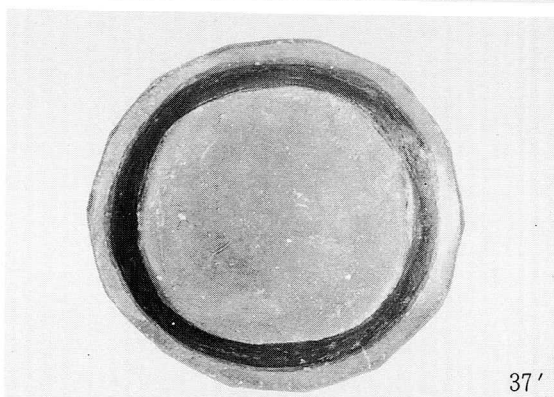
33


36′

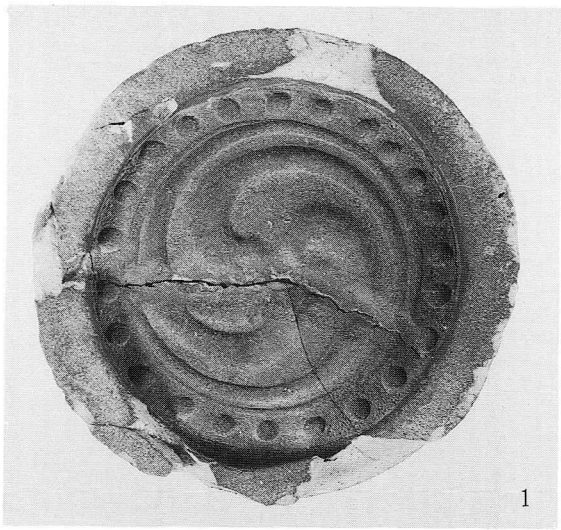

35

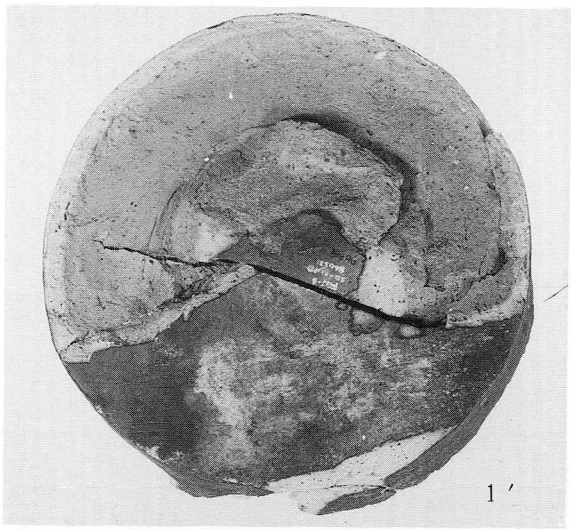

34


37

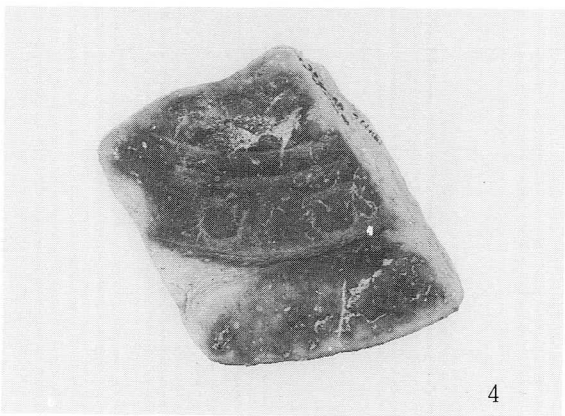

37′

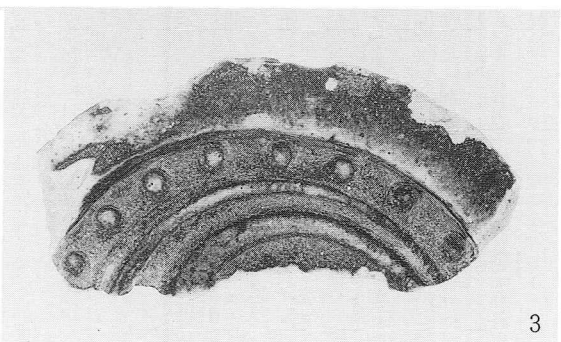
図版10　出土遺物　軒丸瓦


1

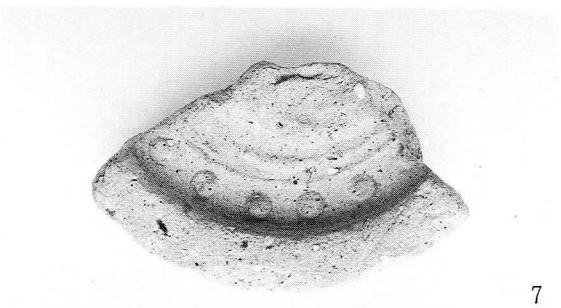

1′

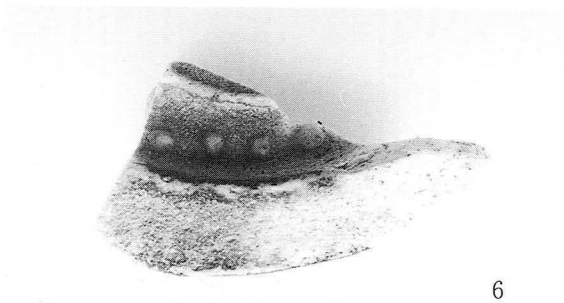
2


4

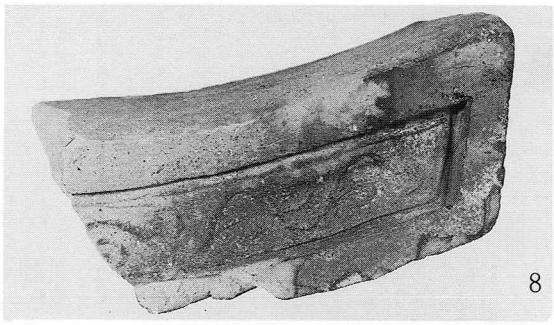

3

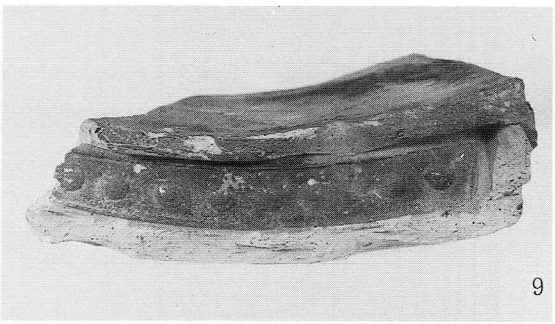
5

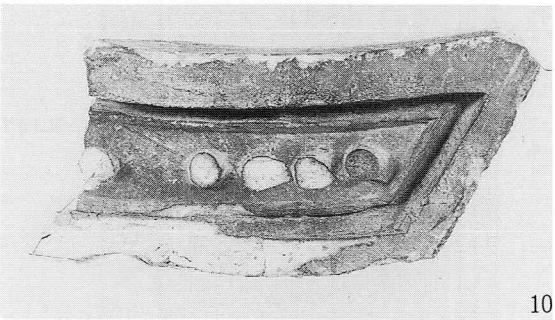

7

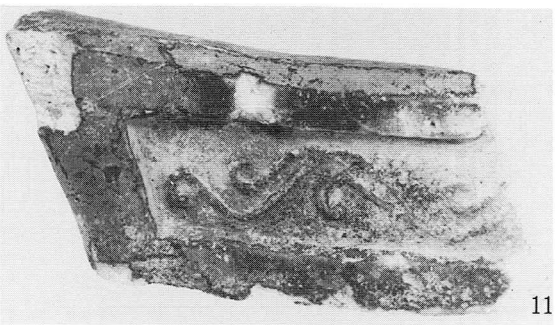

6

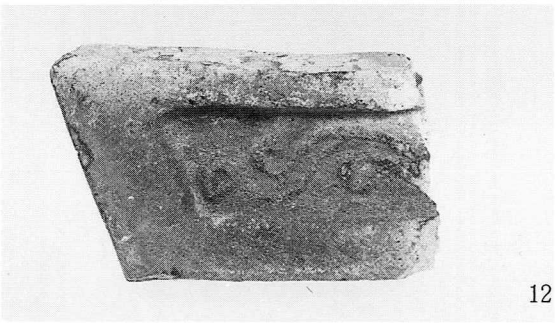
図版11　溝1出土遺物　軒平瓦

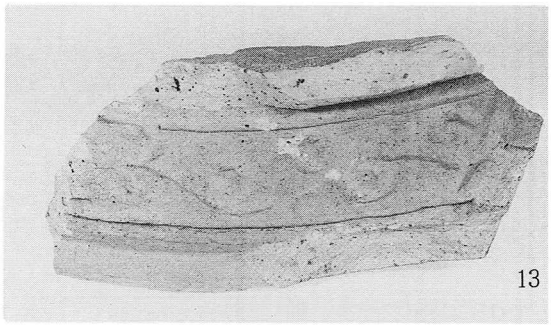

8

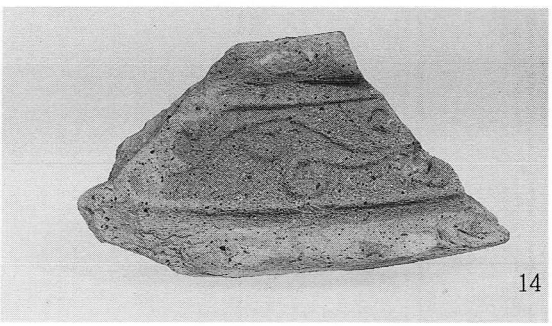

9

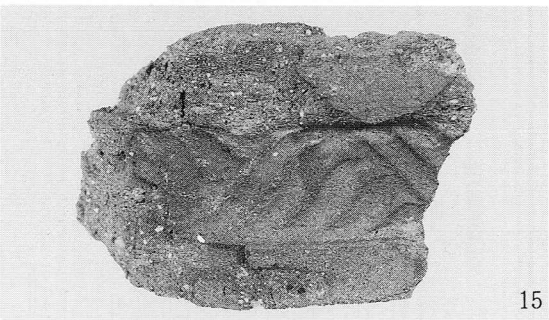

10


11

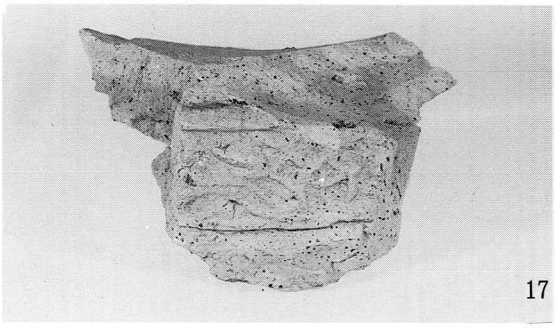

12


13

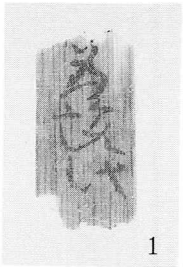

14

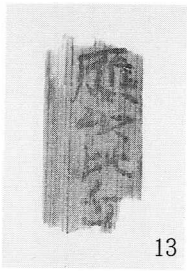

15

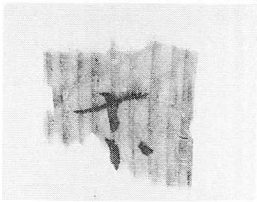
16


17

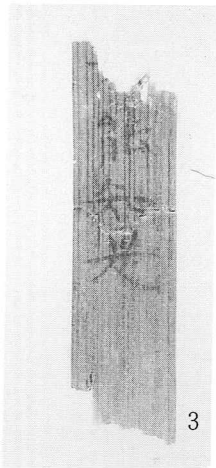
図版12　溝1出土遺物　柿経（1）

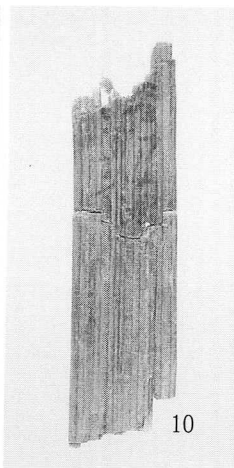

1

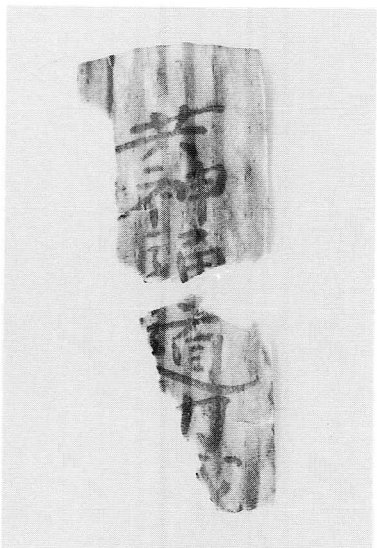

13

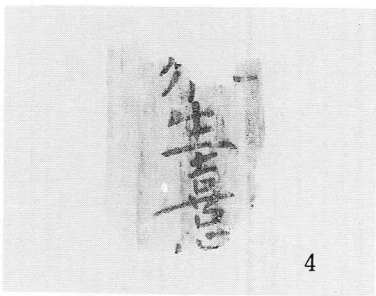


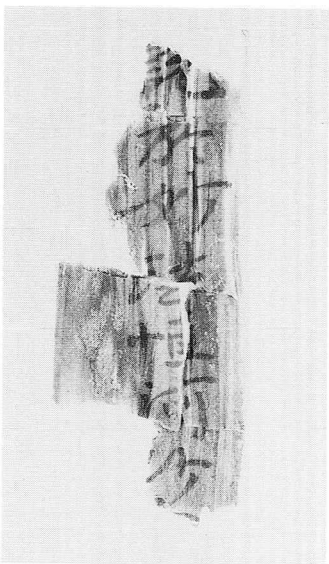
2


3

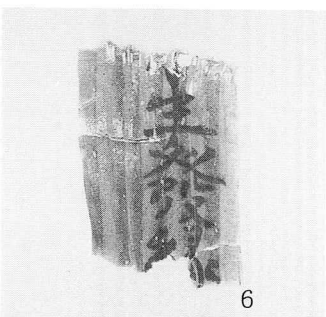

10




4

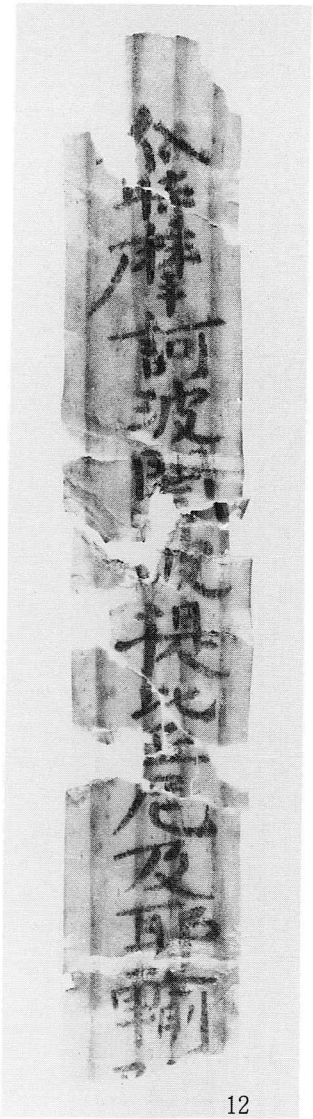


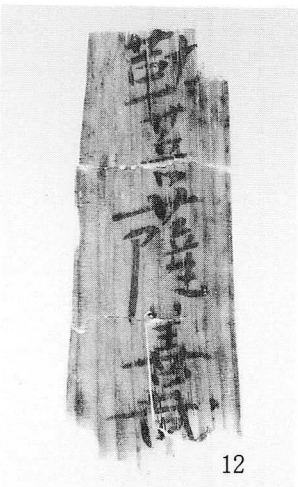
5

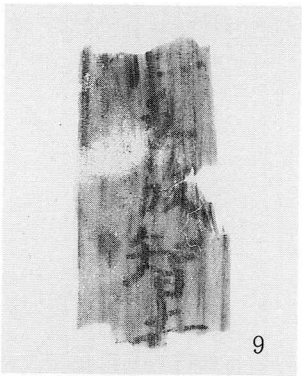

6

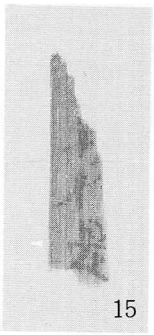
7

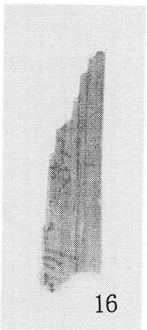
図版13　溝1出土遺物　柿経（2）

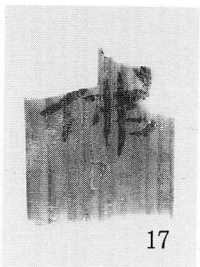

12

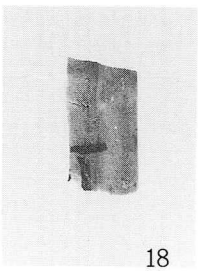

12

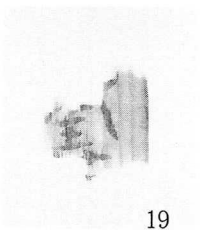

9

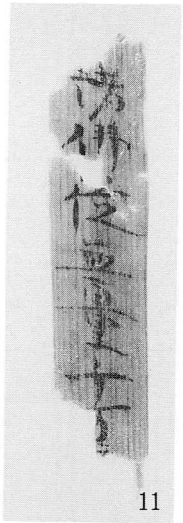

15


16

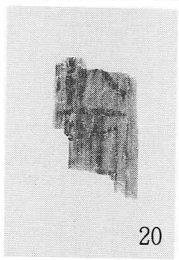

17

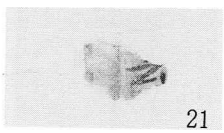

18

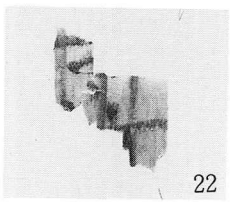

19

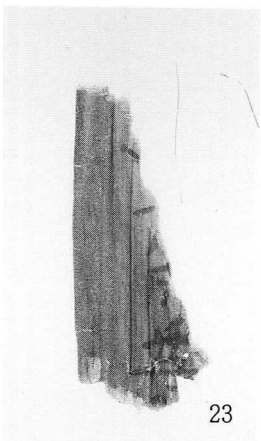

11

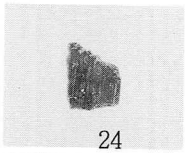
14

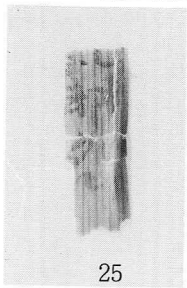

20

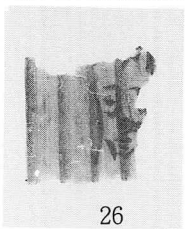

21

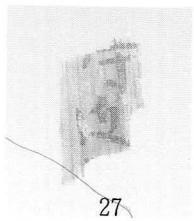

22

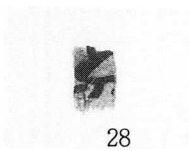

23


24

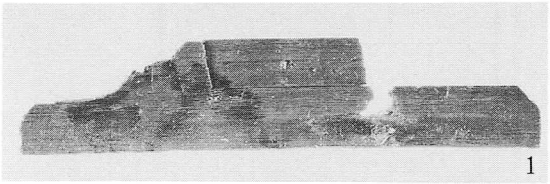

25

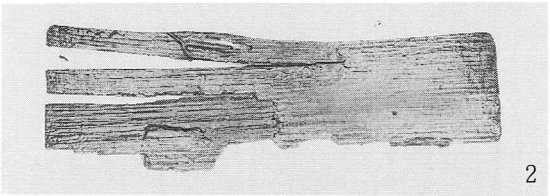

26

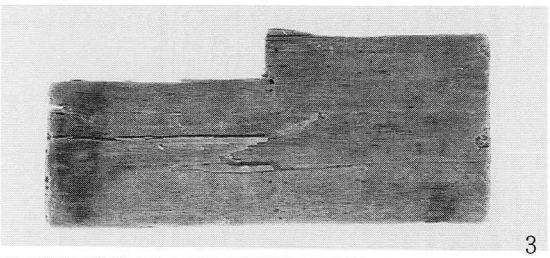

27

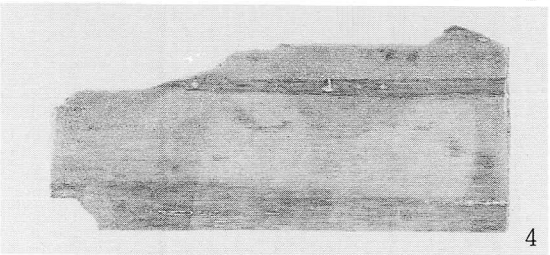

28

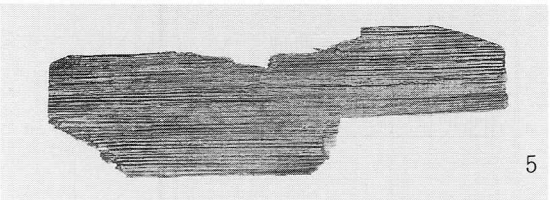
図版14　溝1出土遺物　絵馬

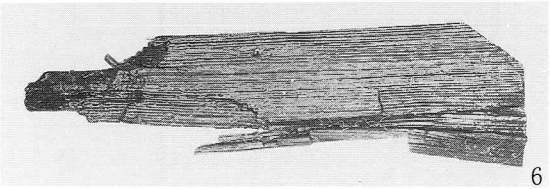

1

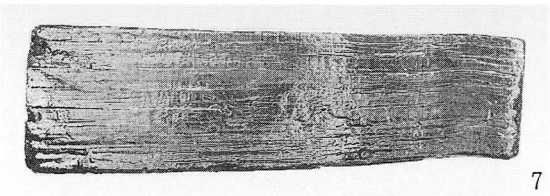

2

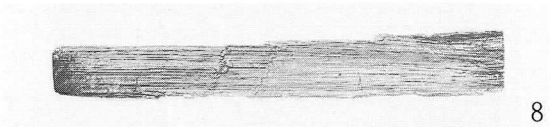

3


4

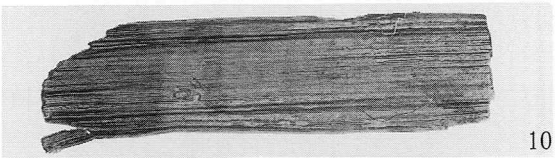

5

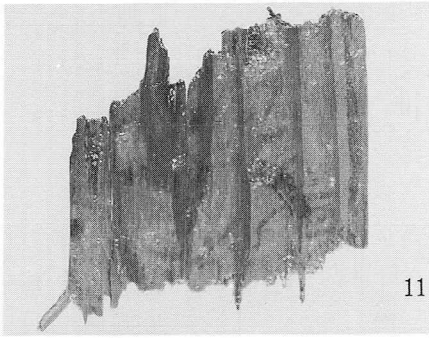

6

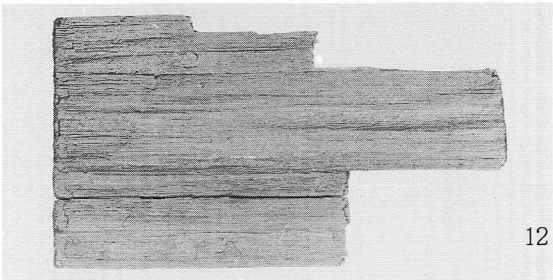

7

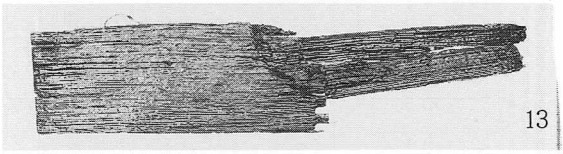

8

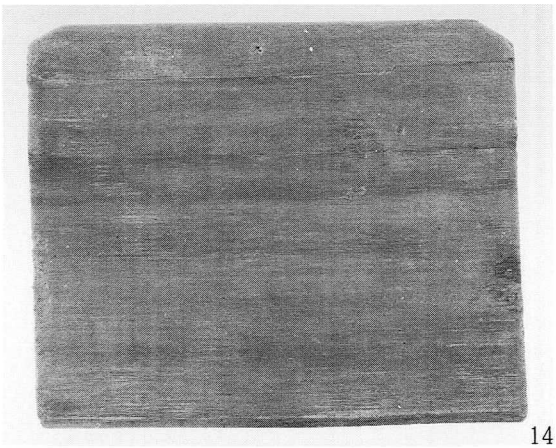
9


10

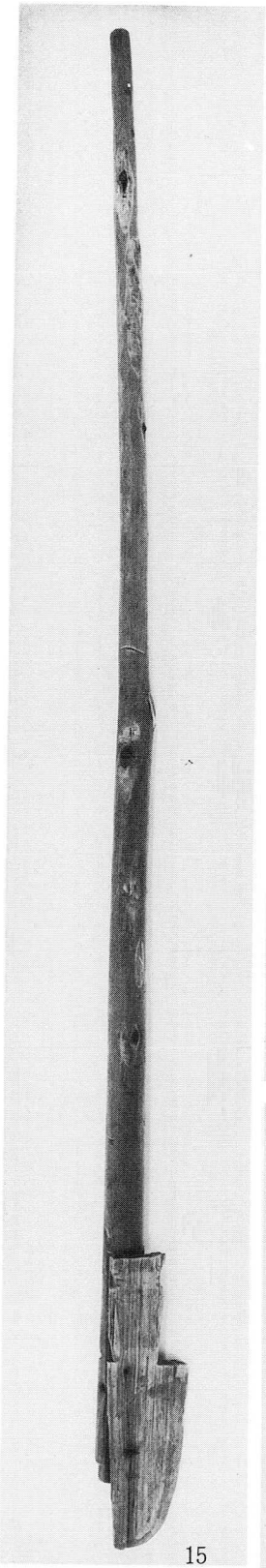

11

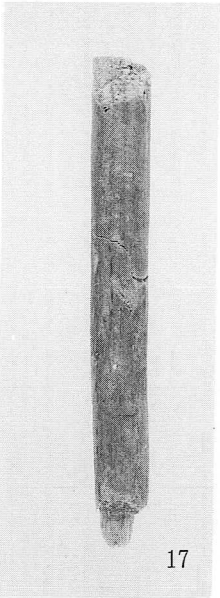

12

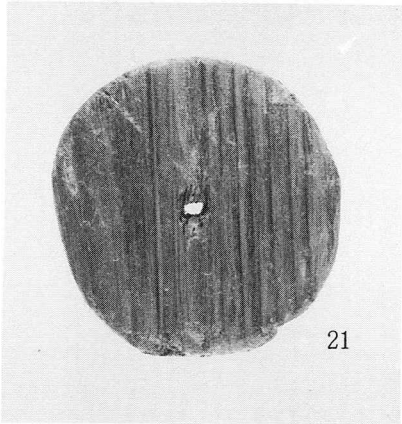

13

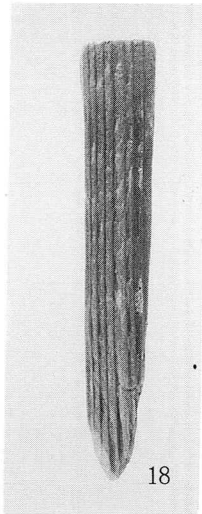

14

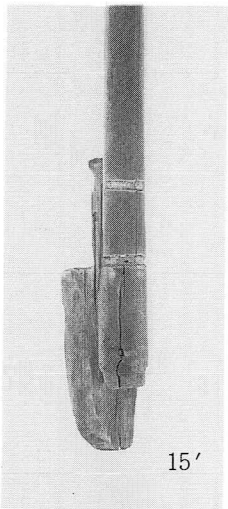
図版15　溝1出土遺物　木製品

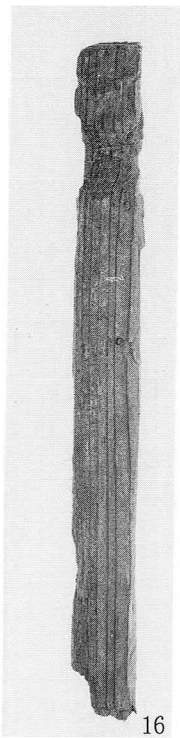

15

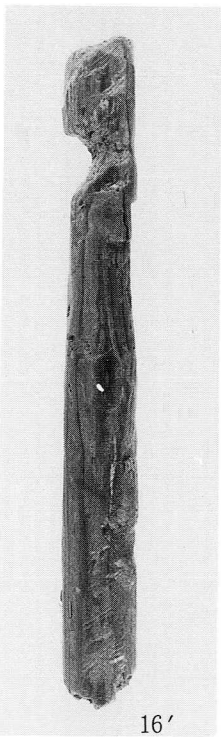

17

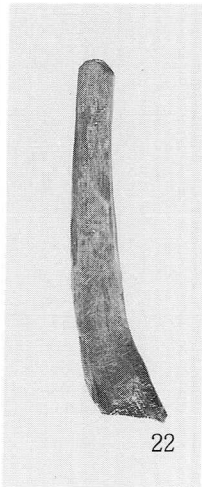

21

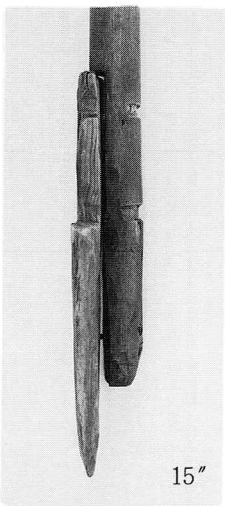

18

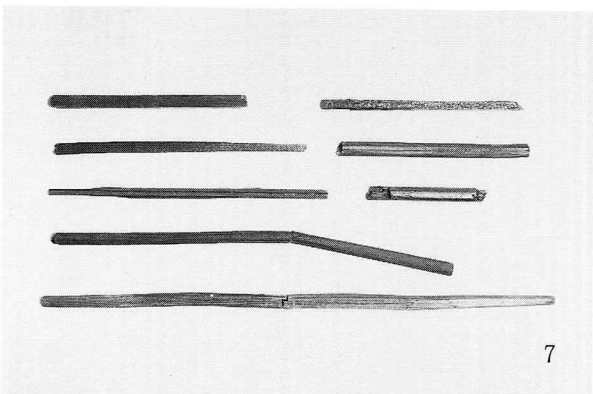

15′


16

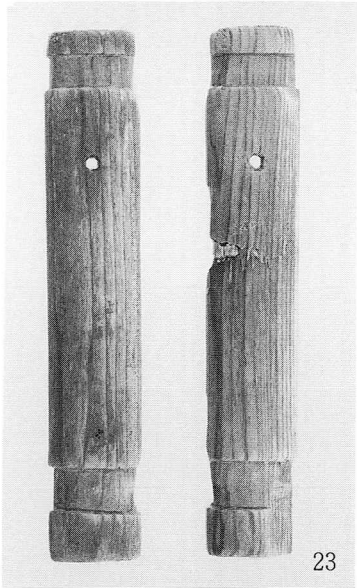

16′

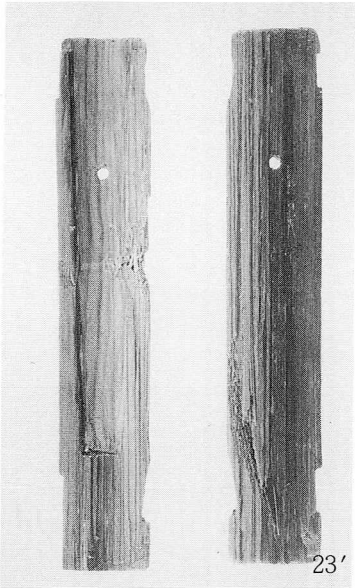

22

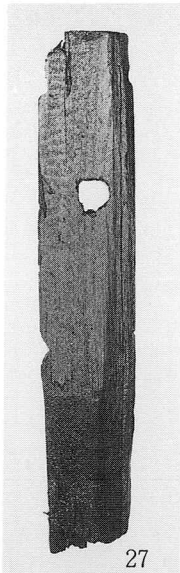

15″

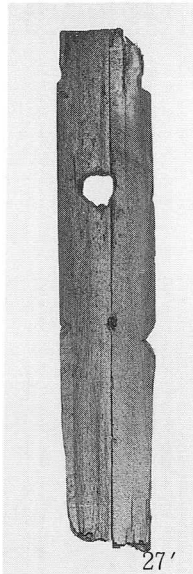

7

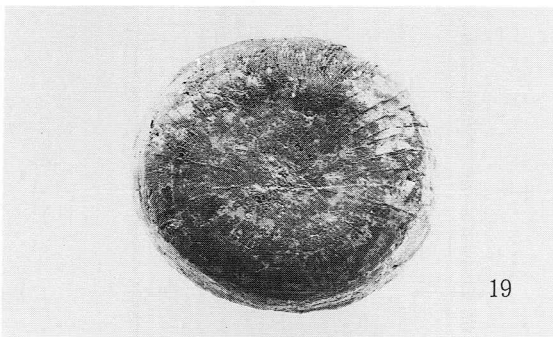
図版16　溝1出土遺物　木製品

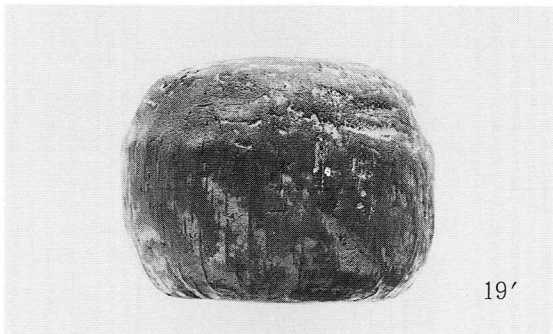

23

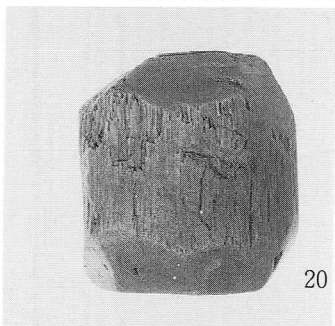

23′

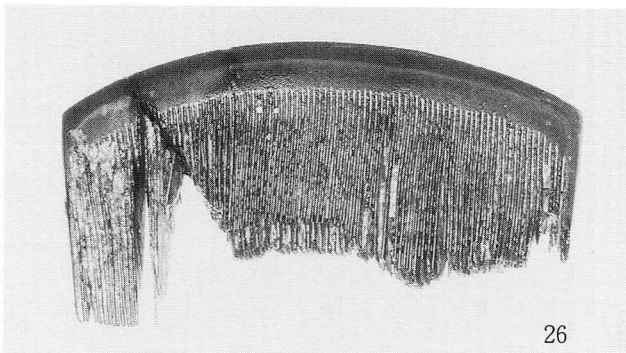

27

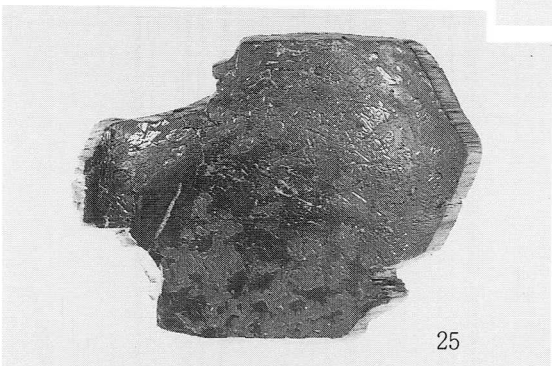

27′

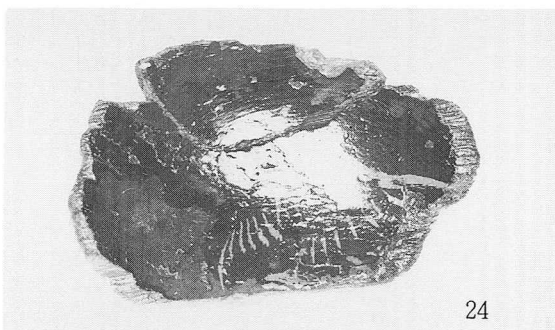

19

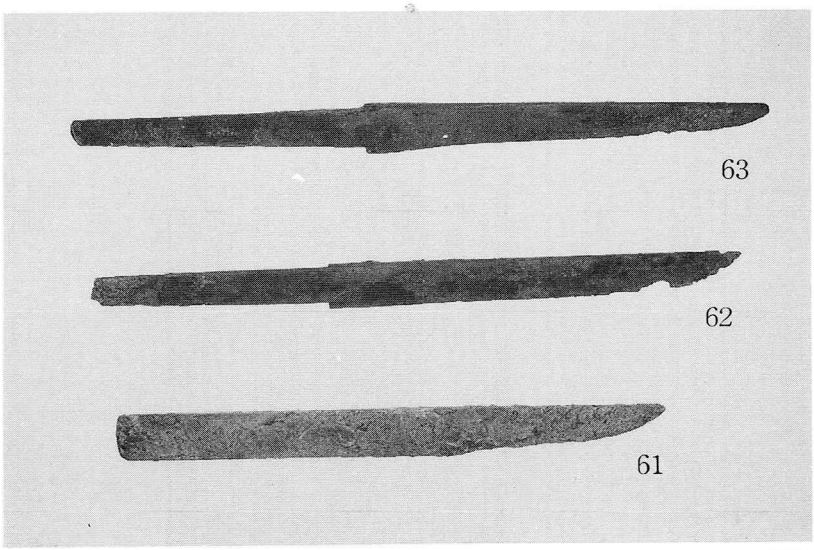

19′

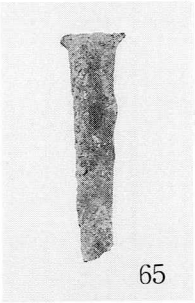

20

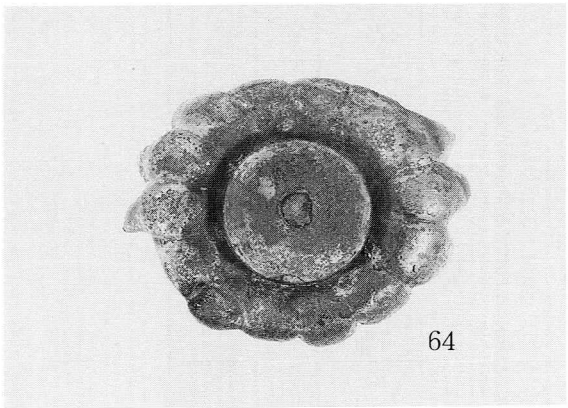

26

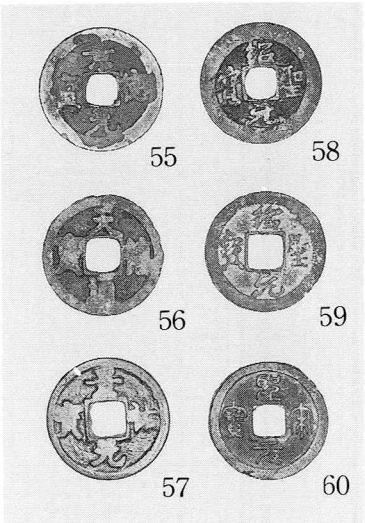

25

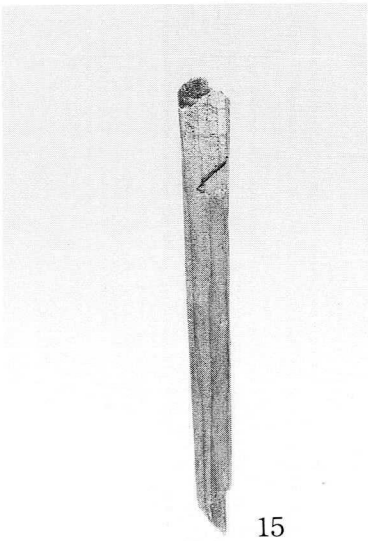

24

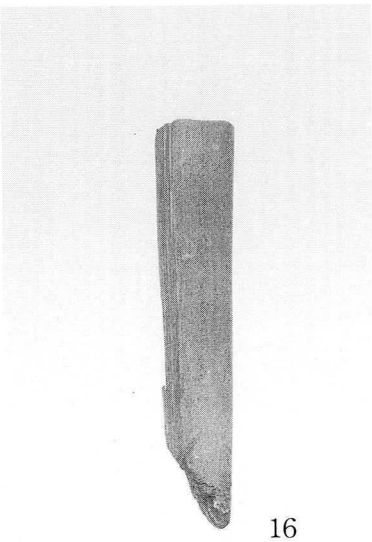

63
62
61

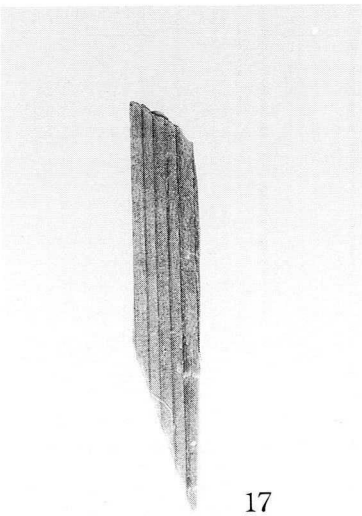
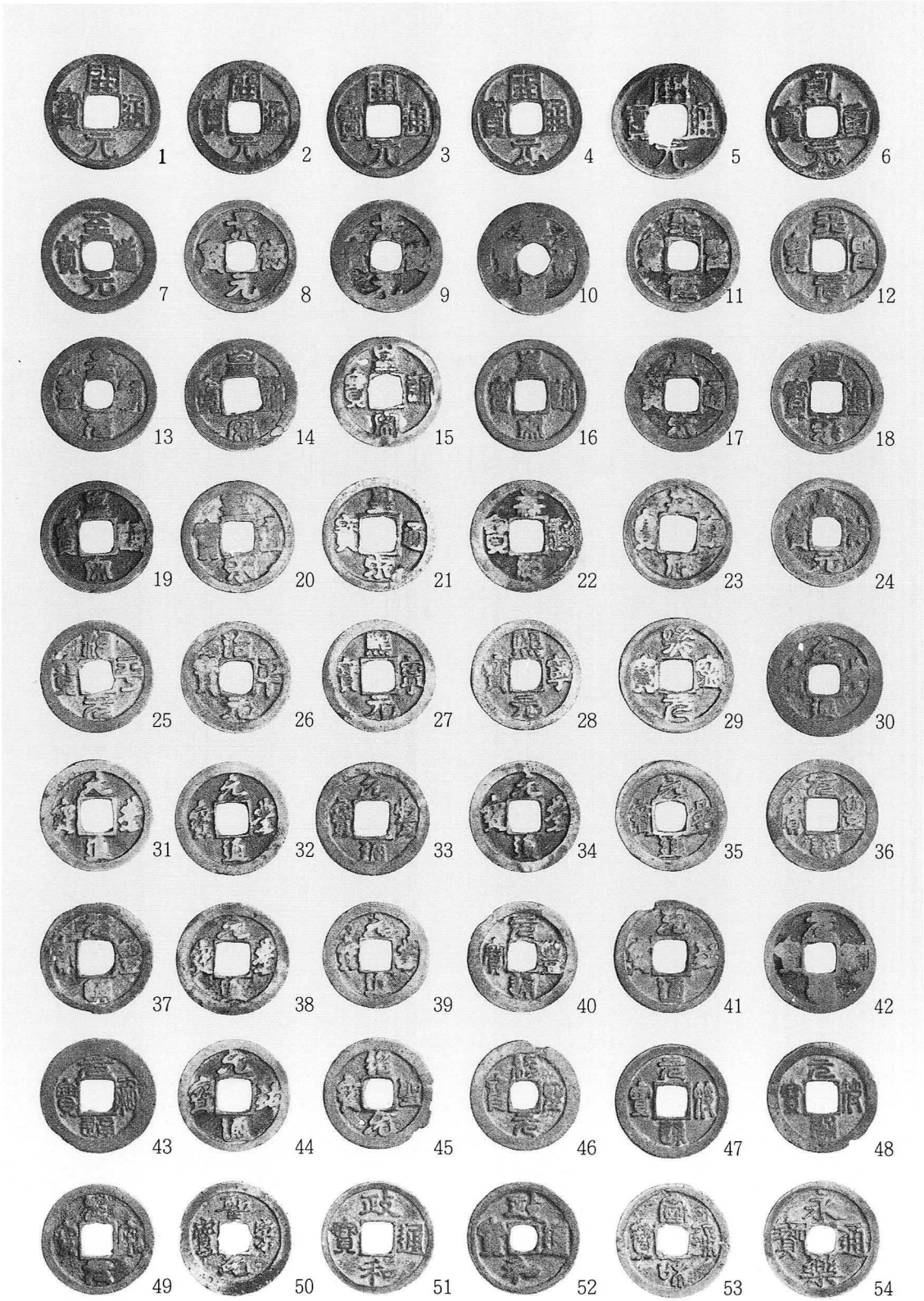

65


64


55
58
56
59
57
60


15


16


17

図版18　溝1出土遺物　輸入銅銭